
ブリューテ・ドウタ

むぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリュート・ドウタ

【Nコード】

N6885X

【作者名】

むぎ

【あらすじ】

世界は金色の鳥に創られ、黒色の鳥によって終わる。創世神話はそう伝えている。

人間とよく似た種族、異形いけいと争う世界で少女アリアは軍の特殊部隊「ブリュート・ドウタ」に配属される。初任務は異形の補給地点である動力炉を制圧すること。先輩ギルとシディと共にアリアは動力炉の侵入に成功する。任務は順調かと思われたが、途中異形の襲撃にあい、アリアは地下へ落とされてしまう。その時、アリアの左腕が黒い翼の形になり、異形を飲みこんでしまう。

世界を消し去る役目を持った少女と、異形との戦いの物語。

pixivに掲載済み、自サイトに掲載予定です

左腕の鳥

父様の言った言葉の意味がよく分からなくて、私は父様を見上げた。私と同じ金色の髪と、私の右目と同じ青い目をした父様が、今にも消えそうな笑みを浮かべていた。部屋の窓いっぱい広がる真っ赤な夕陽で、金色の髪が硝子の粒のようにきらめいて、とても綺麗だった。

「母様のお願いを叶えたい？」

父様はもう一度同じことを言った。私は母様のお願いが何なのか問わない内に、頷いていた。母様のお願いなら何でも叶えてあげたいと思ったのだ。

父様は青い目を少しだけ細めて、私の髪に指を通した。

「じゃあ、そうしよう。私とアリアで母様のお願いを叶えよう」

そう言って父様は私を抱きしめた。

「かあさまのおねがいって、なに？」

父様は私を抱きしめたまま呟いた。

「人間と異形が、もう争わないように」

1 左腕の鳥

世界は金色の鳥に創られ、黒色の鳥によって終わる。世界で信じられている創世神話はそう伝えている。金色の鳥が世界を創り、世界が世界として壊れ始めると、黒色の鳥が世界を消す。そうしてまた、金色の鳥が世界を創る。

今の世界も何度目か分からないけれど、繰り返しの結果らしい。私は気付いた時から、教えられた訳でもなく、ただ知っていた。何度も世界が繰り返すのに創世神話が残る訳は、私のようなものがあるからだろう。

今、私の左腕には、黒の鳥が宿っている。

小さな円卓を七人が囲んでいる。空席があるが、今回の出席者はこれで全員だ。場に満ちる空気は決して楽しいものではなく、それもそのはずで今は会議の真つ最中だった。調度品で飾られた部屋に窓はなく、時計もないので時間が分からない。部屋に入った時には昼だったから、もう夕方だろうか。

「では、最後にブリューテ・ドウタの作戦についてだが」

円卓の上座に位置する人物が私達の方に顔を向ける。金色の少し長めの前髪から青い目がのぞいて、微笑した。

勝気というか、挑戦的というか、陛下は最近よくこの笑みを浮かべる。普段は重そうなマントに身を包んでいるが、今回は前線に出るとあって、今は甲冑の下に着る戦闘衣を着ていた。

「ブリューテ・ドウタには異形の補給地点の制圧を命ずる」

陛下は私から視線を横にずらした。ブリューテ・ドウタとは、私と、私の隣に座っている女性と、その隣に座っている青年のことで、血のように赤い軍服を着ている。横目で見てみると、赤い髪の青年は待ってましたとばかりに瞳を輝かせ、すぐに表情を引きしめた。

「了解しました。陛下」

上座寄りの席に座っている黒い軍服の老指揮官は、あからさまに苦々しそうな目で青年を見た。

「今更伝えるまでもないと思うが、対象は例の動力炉だ。建物内部の情報は知る限り伝える。動力炉に配備されている異形は約三十人、制圧の方法は異形の降伏か殲滅だが、場合によっては建物の爆破も辞さない。作戦に当たる人数が人数だ、ギル、お前に任せる」

「陛下、これは単なる老婆心なのですが」

老指揮官の隣で同じく苦い顔をしていた中年の指揮官が口を開く。「補給地点の制圧は、その、三人だけでは」

「少ないとお考えか、中将」

陛下は楽しそうに言葉を引き継ぐ。敬語なのは年上に対する配慮だろう。何しろ陛下と指揮官達の年齢は親と子程離れている。確か

陛下は二十三歳だったから、この中では赤髪の青年が一番歳が近い。「ブリューテ・ドウタは危険を請け負うのが仕事だ。というより、現実問題として貴殿の部隊からも人員を裂く余裕はあるまい。前線の異形は約千人、対する我々は約五百、その内ブリューテ・ドウタ約百人を魔法支援を含め五人分とみなしたところで九百、こちらが火器を持っているといっても数は芳しくない。私としては前線に重きを置きたい」

いつの間にか陛下は笑みを消して、鋭い目で中将を射抜いていた。「このメンバーを選んだ理由は実績を持って説明する。責任は私が負う。今回はこれで納得いただきたい」

中将は押し黙って、額の汗をぬぐった。

「他に意見があれば聞こう」

誰も口を開かない。黒い軍服の老指揮官も、中将の隣で苦々しげな表情をしたままうつむいている。

「それでは、前線部隊は午前六時、ブリューテ・ドウタは午前三時出発とする」

陛下は円卓を見渡して、満足そうに微笑んだ。

「健闘を祈る。以上」

運転席で赤い髪の青年が大きなあくびをした。

「たく、陛下も人遣いが荒いよなあ」

屋根のないバギーを包みこむ空気は暗く、月が高く昇った空は夜明けにはまだ遠い。

「陛下の悪口を言わないで下さい」

私は隣でハンドルを握っている赤い髪の青年に言った。

普通のバギーでこんな岩肌を走っていたら会話など成り立たないだろうが、これは運転手の魔力を動力にして地上すれすれに浮いて走るので大丈夫だ。運転手の技量と魔力にもよるが、普通のバギーより三倍程速い。ただ、屋根がないので風が耳を裂いていって、おまけに髪が顔を叩いて邪魔だ。

後部座席から、私と青年の間に金髪の女性が乗り出してくる。

「何？ あんた陛下が好きなの？」

からかっている風ではなく、退屈しのにぎに聞いているのだろう。女性は風で暴れる髪をうつつとうしそうにかき上げる。頬のあたりで切りそろえられた髪は私より短いけれど、邪魔なのは同じらしい。

「別に、そういう訳じゃ」

「初仕事がこんななんて、ついてないなお前」

そういう青年の顔はあまりつまらなそうではない。むしろ目が慣れてきて見間違いでなければ、会議で見た時より楽しそうだ。

「というか俺まだお前の名前聞いてないや」

「相変わらず適当ですね、先輩」

「そう言うなよ、会ってからすぐ会議で話す暇なんてなかっただろ」「仮眠の時間を削ればよかったじゃないですかと思いましたが、さすがにそれはないですね」

「そうそう。睡眠は食べるのと同じ位大事だぞ。分かってるな、シデイ」

女性は金色の髪を押さえて、私の方を向く。

「シデイ・ビジュネ」

確か百名程のブリユーテ・ドウタの中で女性は一人と聞いたから、この人がそうなのだろう。歳も同じ十八歳だし、唯一の同性だから仲良くしなさいと陛下が言っていた。

「ギル・ライオネル」

青年の声が聞こえて、私は視線をそちらに移す。ブリユーテ・ドウタの平服は黒いスーツに黒いネクタイだが、この人はネクタイをせずにシャツのボタンをあけて黒いチョーカーをしている。

「分からないことがあったら今のうちに聞いとけよ。あ、ちなみに先輩って呼んでるのこいつだけだから、呼び捨てでいい。ブリユーテ・ドウタは呼び捨ての方が慣例だから」

ギルは赤い短髪を風に揺らしながら、シデイを指差す。私は頷いた。

「アリア・トリニアです」

私を見ていた二人の目が見張られる。納得したようにギルが声をもらした。

「だから陛下のお気に入り、か」

数時間前の会議、陛下の隣にいた男性がエルドイ・トリニアだった。先代の皇帝から側近という立場についていたそうので、陛下の信頼も厚い。

「トリニア大将の娘か」

ギルはハンドルを握ったまま、私の方に少しだけ身を乗り出してくる。

「先輩、安全運転」

「いや、あんまり似てないなと思って。髪の色とか。まあ目の色が特別だから似てなくても不思議じゃないのか」

確かに父様の髪は薄い茶色で、私の髪は薄い金色だ。目はギルの言う通り、左目が緑で、右目が青い。

「しかしまあ、いいところの娘をこんなところに放りこむとは。陛下もトリニア大将も何を考えてるんだか」

私が口を開く前に、ギルは私の方を見て口を開く。

「あ、今のは悪口じゃないからな。むしろ今回は中将らと一緒に行動しなくてすんで感謝してる。見ただろ、あの顔」

ギルはなぜか楽しそうに笑った。中将とは会議で意義を唱えた人だ。

「あれは私もほっとしました。一般人が混ざるとやりにくくて面倒です」

「シデイ、悪口はいつか本人の耳に入るぞ」

「先輩もお互い様です」

「あの、ブリユート・ドウタって何ですか」

ギルは虚をつかれたような顔をする。

「何も聞いてないのか？」

私は頷いた。私は今まで違う場所で戦闘訓練を受けており、つい

昨日初めてこの人達に会って、ブリューテ・ドウタとして作戦に参加するように言われた。

ギルは束のある赤い髪をなでつけて目を細める。

「まあ、いいけど。ブリューテ・ドウタってのは言葉通り、ブリューテ・ドウタ（血まみれの犬）。よく言えば魔法が使えるエリート集団、悪く言えば陛下の犬かな？」

「何でそれで血まみれになるんですか？」

「昔は一般兵より突出したやつが集まってただけだったけど、そのうち魔法が使える奴を集めた集団に変わって、小回りのきく特殊部隊になったと。で、特殊部隊だけ軍服が赤かったから、非公式に揶揄されて呼ばれてた名前を、皇帝が面白がって正式名に採用したらしい。って俺は聞いた」

ギルの言葉が切れて、私は首をかしげる。

「特殊部隊なら名誉なことではないんですか？」

ギルは渋い顔をしてうなり声を上げる。

「名誉ねえ。俺はこの仕事好きだけど。要は恐れとやっかみだ。確かに陛下直属の部隊だから名誉ではあるけど、一般兵と俺達は違う。奴らは魔法が使える俺達のことを内心では異形いけいと同じだと思ってるんだ」

ああ、そういうことか。ようやく腑に落ちた。

人間と異形いけいは遙か昔から争いを続けていて、どちらかが衰退し、繁栄してを繰り返して今に至る。異形は人間と似ているが、体の一部の形や髪の色が違い、人間が魔法を使えるのが少数なのに対し、異形はほぼ全員が魔法を使える。

異形というのは正式名称ではない。ただ人間に似ているけれど人間ではない種族だから異形と呼んでいるだけで、その証拠に異形は人間のことを「異形」と呼ぶのだ。

争いの理由などもう誰も覚えていない。争っていた過去があるから、どちらかが根絶やしになるまで続くだけだ。

「先輩、いつからブリューテ・ドウタにいるんですか」

ギルは気のない声を上げて上を向く。

「十四からだから、六年前。早いなあ。って、そーいや作戦について何も話してなかった。もう着くから手短かに話す」

ギルはジャケットの胸ポケットから折りたたまれた紙を出して私に渡す。風でうなる紙を広げると、四角がたくさん連なった絵柄がどうにか見えた。

「建物の見取り図、一応渡しておく。今回の目的は前線への補給地点になっている建物を制圧すること。で、建物だけど、元々はこっちの持ち物で、地下から魔力をくみ上げる動力炉だったんだけど、いざ完成してみると設計の欠陥で魔力が取れなくて、結局使われなくなった、と」

「完全に無駄遣いですよね」

シデイが呟く。

「まあ戦争が始まってからは一応補給地点として使ってたけど、それも一年前異形に奪取されてしまったと。背景はこんな感じ」

ギルがこちらを見て、今までの話は私にしていたのだと分かり、頷いた。考えてみればシデイは少し前からブリューテ・ドウタに所属していたから、知っているのだ。

「という訳で基本三人で固まって行動するけど、自分の命を最優先にしるよ。以上。このままつつこむから準備しとけ」

「つつこむって、車のままですか？」

シデイは怪訝な声を上げる。

「ん。で、内部に侵入する手前で降りる」

「帰りはどうするんですか、って、そんなこと考えなくていいですね。分かりました」

ギルを見ると、横目で私を見て笑っていた。

「実力見せてもらおうか。ええと」

「アリアです」

「そう。アリアな。覚えた」

「どうだか。私の時は一ヶ月かかりましたよね」

私の手の中で騒々しく音を立てる紙の横で、シデイが呟いた。

黒い岩肌しかなかった景色に、赤い光が見えてくる。一つではなく、固まるように一箇所に集中していた。赤い光は炎だと分かって、炎に囲まれて見えてきた建物が動力炉なのだろうと思った。横幅はそれほどなく、高さがある。要塞としては堅牢な造りではないだろう。

音がして振り向くと、シデイが何やら座席の下からサブマシンガンを取り出していた。

「あの。捕虜は必要ですか」

何か喋っていた方が落ち着きそうだったので、ギルに尋ねた。

「捕虜なんてどうせ前線が出るからいい。って、お前は初陣なんだから生きることだけ考えてればいいんだよ」

ギルは私の頭の上に手を置いた。それがあの人に似ていて、少し驚いた。

「先輩」

シデイが冷静な声を出すと、ギルは前を見てハンドルを思い切り右に切った。車体が浮いているとはいえ、私は反動を思い切り受ける。視界を戻す暇もなく爆発音がして、今度は逆方向に体が叩きつけられた。

「気付かれた。気を付けろよ」

私はシートベルトをつかんでようやく前を見た。

建物は目前で、前、横、斜めから火の球がこちらに飛んでくる。視界がぶれて、ギルが全て避けているのだと分かった。炎に照らされて、建物の前に異形が十数人集まっているのが見えた。

「シデイ、撃てるか」

ギルが叫ぶ。

「魔法なら、でも数が多すぎます」

「私が撃ちます」

私は会話に割って入っていた。

「全員動きを止めればいいんですよね」

叫ぶと、ギルは驚いたような顔で私を見ていたが、気付いたように頷いた。

「分かった。やってみろ」

私は頷いて、左手を胸に置く。

『世界の終わり 透に包まれ』

本当は詠唱を破棄して呪文名だけで成立させることができるのだが、今は自信がなかった。服の上からだというのに自分の鼓動がはつきり聞こえて、左腕がわずかに焼けるように疼く。

『この手の先を裂き尽くす』

私は魔力を集めた左腕を突き出した。

『アリス』

耳を裂く風の音が消えて、私のまわりから風が消える。瞬間、左手の先から空気のうちねりがほとばしった。先程までの風とは比べ物にならない音と反動が体を襲って、自分自身が吹き飛ばされぬように反動を魔力で殺す。

風が収まり、薄暗くなった建物を見ると、建物を囲っていた炎は消えていて、見えうる範囲では誰も立ち上がっていないかった。

成功した。そう思ったら、ギルが私を凝視しているのに気が付いて、私は自然と体を硬くしていた。

「ごめん、なさい。炎も消してしまいました」

「いや、別にそんなことはどうでもいいんだけど。すごいな。魔術師なのか？」

よく見たらギルの表情は怒っているのではなくて、純粋な驚きだった。

確かに人間で魔法が使える者の中では魔力は最高ランクだろうと、陛下は言っていた。ただ、実戦は初めてなのでよく分からない。

「あんまり無理には撃つなよ。そのために武器があるんだからな」

「大丈夫です。役に立てたなら。魔力は、たくさんあるので」

ギルは何か言いたいのか私を見ていたが、目前の建物に目を移した。

「それじゃあ、一丁侵入しますか」

私達は手前で車を降りて、見上げる程の高さになった建物へ侵入した。

内部は動力炉の趣で、壁には太い配管が埋まり、広い空間にいくつも梯子がかかっていた。手すりにつかまって通路から下を見ると、中空を切るように通路が何本も走っていて縦に移動していくような構造になっている。外と違い電気が通っているようで、薄暗いなりにも物は見える。

「それで、責任者は上下どっちですかね。下かなと思いますけど」
「同じだな。お前は？」

声が飛んできて、反射的に体が震えていた。

「私も、下だと思いました。魔力の流れが少し乱れている気がします」

ギルは感心したような声をもらして、こめかみに指をあててうなり、すぐにやめた。

「まあ、言われてみればそんな気もしたけど、俺は勘だな。動力炉の心臓部が下だってだけ」

「それで合ってると思います。魔力を補充する場所を離れる理由があまりないので」

「では下ですね」

シデイが肩にかけたサブマシンガンの肩紐を担ぎ直す。歩き出すシデイをギルが呼び止めた。

「俺が前で、シデイが後ろで、お前が真ん中な。基本」

「先輩、名前を覚えてあげて下さい」

「覚えてる。ええと、アリアだろ。呼ばないだけで」

ギルは子供のようにむきになって言い返していた。

歩き出したギルの後ろについて行って、振り返ると後ろからシデイ

イが歩いてきていた。目が合うと、どうしていいのかわからず視線を外してしまう。

「前向いてないと転ぶよ」

私は精一杯頷いて前を向く。

「何だよ、ちゃんと前向いて歩いてるぞ」

「先輩じゃありません」

「冗談通じないな」

声途切れると、聞こえるのは虚空に反響する靴音だけになる。

「誰もいないんでしょうか」

内部に入ってからまだ三十分もたっていないが、異形の気配が近くに感じられない。

「単純に考えれば罨だろうな。それか残ってる奴らが意外と少ないとか」

「せつかく気合入れてきたのに無駄でしたかね」

「まあ罨にしる何にしるやることは同じだ。って、ちよつと待て」

ギルが急に立ち止まって、私は背中にぶつかりそうになった。

「何ですか、先輩」

ギルの背中を避けて前を見ると、道がなくなっていた。正確には、今まで通路だった足元から、中空を向こう側まで、水平に梯子が渡っていた。下は、やはり黒しか見えない。魔力で体を覆っているとはいえ、落ちたら死ぬかもしれない。

「これは、渡れないだろ。上からも下からも」

上からというのは梯子の上を歩いて渡るといことだろう。下からというのは、梯子にぶら下がって渡るといことだろうか。

「まいったな。迂回はできないよなあ」

「いつそのこと落ちた方が楽ですね」

「それはちよつとなあ。浮いて渡るしかないか」

「浮いてって、スイル（飛行呪文）ですか？」

私が言うと、ギルは頷く。

「俺、苦手なんだよなあ」

呟くギルの後ろで、私の鼓動は速くなっていく。

「あ、の、すみません、私、スイル（飛行呪文）は使えないんです」
両側から、ギルとシデイの視線が集中したのが分かる。

「だから、ここで置いていかれても、構わないです」

「別にそんなに申し訳なさそうにしなくてもいいから」

意外なことにシデイが口を開いて、私は顔を上げる。

「意外だな。魔力高いと何でもできるのかと思ってたけど。むしろ高いから逆にできないのか？」

「かかえて渡るのが一番現実的ですかね」

「んん、でも順番がああ。俺が試しに先に行ったら、シデイが抱えないといけないんだぞ」

「肉体強化に魔力を使えばできますけど、スイル（飛行呪文）との併用は少しつらいですね。心配なら先輩が先に行って、問題がなかったら戻ってきて下さい」

ギルは真面目な顔になって、目を細める。

「まあいいか。いい、俺が抱えて渡る。しかけてくるなら多分ここだろうし、二回渡るのも無駄な気がする」

ギルは私に背を向けて、しゃがみこんだ。

「ほら、乗って」

おぶるから背中に乗れということらしい。

「あ、の、それは」

「先輩、嫌がられますよ」

申し訳ない気持ちでいつぱいになっていると、横からシデイにつこまれた。

「いえ、あの、嫌な訳ではなくて」

「俺だってお姫様抱っことかの方がいいと思うけど、こっちの方がまだ安定するから仕方なくなんだよ。今回は我慢してくれよ。な？」

何だかそういう訳でもないのだが、進めない方が迷惑だろうと思つて、私はギルの肩をつかんだ。持ち上げられると、視界が上に移動する。

「あの、ごめんなさい。本当に」

「まあこの借りは今後の働きで返してくれよ。行くぞ」

笑いながら持ち上げ直されて、私は小さく悲鳴を上げていた。

『世界の続き 透に包まれ 鳥に願ひ この身の全てを飛行させる
スイル』

まわりの重力がなくなったような感覚にとらわれて、ギルはそのまま滑るように一步踏み出した。

「一応、何が起こっても大丈夫なように心の準備はしといて」

私は小さく返事をする。落ちる可能性はもちろんだが、奇襲される可能性も高い。銃は暴発が怖いので、攻撃手段は魔法になるだろう。

視界がゆっくりと中空を進んでいって、両側からすぎるものが何もなくなっていく。若干浮いているとはいえ、ギルは間違いなく梯子の上を歩いていて、綱渡りと同じなのだ。底は黒い闇で、傾いてもないのに体が吸いこまれて落ちていくような錯覚を起こす。指先が震えて、ギルの肩を強くつかんでしまった。

「怖い、です」

「ああ、下は見るなよ。俺も怖いから」

「もう手遅れです」

多分、飛べたらそれ程までには怖くないのだろう。異形が仕掛けてくるならここだとギルが言っていたが、そうすると現れる場所は限られてくる。

ふと体に違和感が走る。私の中の魔力が波立って、振幅を増していく。

「降ろして下さい」

私は声を高くしていた。

「どうした？」

「異形が来ます。この状態で戦うのは無理です」

こんな時だというのに、ギルが笑ったように聞こえた。

「何言ってるんだ。降ろしたらお前落ちるだろ。で、上下どっちだ」

上ですと言おうとしたら、ギルが梯子の上を横跳びして、声が悲鳴に変わってしまった。

「あつ、ぶねえ」

先程いた場所の梯子がひしゃげていて、羽音と共に、何も無い空中を異形が、飛んでいた。姿は人間の男性と同じで、背中に片方だけ鳥のような白い翼が生えている。目で追えただけでも、六人はいる。

『おい、無駄だと思うけど話し合う気はないか』

ギルが空中に向けて分からない言葉で叫んだ。飛んでいた異形の一人が、目の前の空中で翼を羽ばたかせて静止する。

『俺達の目的はこの占拠だ。立ち退くなら殺し合う必要もない』

黄緑色の髪をした異形の青年は、侮蔑の笑いを浮かべた。

『俺達とお前達は殺し合う他ない。ここを渡す気もさらさらない』

「んじゃあ決裂だな。シデイ、やっちなまえ」

シデイがサブマシンガンを構えると、土砂降りのような発砲音が空間に鳴り響いた。

「アリア、全員撃ち落とせ。シデイが危なさそうだったら援護しろ。絶対落とされるなよ」

私は返事をして左手に集中する。異形の動きはまだ目で追える。今なら撃てる。

『ワプラ』

空中に発生させた雷撃が異形の一人を捕らえる。撃たれた異形は声も上げず、地の底へと落ちていく。

「詠唱破棄か」

ギルの言葉に返事をする暇もなく、ギルは体当たりを繰り返してくる異形を避けて梯子の上を跳ぶ。ぎりぎりのところで避けた異形にワプラ（雷呪文）を撃って、もう一人底へと落とす。横目で見るとシデイも善戦しているようで、二対一ではあるが、危険な状態には見えなかった。

『ニーロ』『ワプラ』

空中の二方向から同時に呪文が飛んでくる。

「あつちを避けて下さい」

私は炎を指差して、向かってくる電気の塊に向けて叫ぶ。

「オスタ」

水球の中に電気が鮮やかに弾けて、目がくらんだ。耳が異質な音をとらえたのと同時に、ギルが私の名前を叫ぶのが聞こえる。

体が浮き上がる感覚の後、私は足場を失っている自分の体を見て、異形に捕まえられたのだと知った。羽音と笑い声と共に私は重力を取り戻して、黒い底へと、落ちていく。背中から落ちていく時、全てがゆっくりと見えて、ギルとシデイが目を見開いてこちらを見て、いるのもよく分かった。黄緑髪の異形の狂ったような笑みを見て、左腕から指先の熱がなくなった。

私は、生まれて初めて、頭に血が上った。

左腕から真つ黒いもやが噴き出す。光を通さない黒いもやは一瞬で空中に広がり、異形達を絡めとり、飲みこんでいく。遠くになっていく景色の中で、黄緑髪の異形の顔が笑みから驚愕に変わり、黒に飲まれたのが、見えた。

落ちていくという状況が、私はまだよく理解できていなかった。でも、上はもう大丈夫だろう。さあ、飛べないと言っている場合じゃない。怪我を負って抑えこめなくなってしまうよりは、自分から飛んだ方がまだ制御も効くはずだ。

遠くなつていく梯子を眺めながら左腕に意識を集中させると、梯子から、誰かが落ちた。異形は全員飲みこんだから、落とされたのではないはずだ。

「絶対落ちるなつて言っただる馬鹿」

怒号が反響して何重にも聞こえる。ギルが、落ちてきている。今度こそ私の頭は止まった。どうして？ 自分から落ちてきたというのか？ 私が落ちてしまったから？

左腕が内側から破裂するような痛みを感じて、意識が引き戻された。左腕があるべき箇所を覆う黒いもやは、今は鳥の翼の形をして

いた。駄目だ、腕が、鼓動している。集中を切った隙に体も心も半分持っていていかれたようだ。

今はただ、申し訳なかった。眠りに落ちる直前のように、目に見えるものも、思考も消えていった。

水が沸騰するような音が聞こえていて、目を開けた。左腕を見ると、痛みは残っているけれど、もやは消えて元の腕に戻っていた。

瞬間、思考が糸のように繋がって跳ね起きると、地面にはえぐられたように大きな凹みができていて、かたわらにギルが倒れていた。私は四つんばいで近付いていって、ギルの肩を叩く。

「大丈夫ですか、ギル、さ、ん」

まさか、死んではいないだろう、もう一度叩く。

「さん付けとか、気持ち悪いから、いい」

弱い声に次いでギルが目を開ける。私は自分が息を止めていたことに気付いて、吸って、深く吐き出した。

「回復をかけますから、ちょっと、待って下さい」

左手を胸にあてると、左腕が鼓動して、痛みを上げてしまった。

「おい、お前の方が酷いんじゃないのか」

ギルが上体を起こす。

「大、丈夫です、収まりますから」

先程に比べたらまだ抑えこめる。左腕をつかんで呼吸を整える。

「折った、訳じゃないか」

ギルもシデイも、私が落ちた直後、左腕が黒に飲まれるのを見ているはずだ。

ギルの指が私の左腕に触れて、反射で振り払うより先に、違和感があった。左腕の鼓動が弱まったのが分かって、痛みが薄くなっていく。

私はギルを見た。思っていたより近くで目が合って驚いたが、暗

がりだというのにギルの目は金粉を散らしたように綺麗な金色をしていた。金色の目なのだと、初めて意識した。

「収まり、ました。大丈夫です」

私が左腕から手を離すと、ギルも指を離す。

「それは、よかった」

私以上に安堵したのか、ギルは目覚めてから初めて笑った。

「回復をかけます。どこが一番酷いですか？」

「いや、別になんかなくていい。全身打っただけで大怪我はしてないから」

意外だった。肉体強化に魔力を使っても、地面に激突すればどこかしら骨を折ると思っていたのだ。

「どんな魔法を使っただけですか？」

「スイルでなるべく衝突の瞬間を和らげただけ。お前抱えてな」

私は眉を寄せる。

「私、浮いてませんでしたか？」

「落ちてたぞ、ずっと」

私が気を失う前、体と心は既に飲まれていたから、意識がなくなればあちらが優位になって飛べる、というか少なくとも浮きはするはずなのだが。

「あ、でも、若干止まっていた、かな？」

ギルは思い出したように付け加える。

「でも、追いついて俺がつかんだら浮きはしなかったから、そのまま落ちたってことだろ？」

何だろう、よく分からないが、今考えても分かることではないだろう。私は胸の前に左手をかざして、呪文を唱える。

『世界の続き 白に包まれ この身の先を回復する ノゼリオ』

淡い光に包まれた左手をギルの左胸に当てると、光は吸いこまれるように薄れてなくなった。ギルが小さな声で礼を言う。

「平気なのか？ 魔法使って」

「魔力はたくさん、あるので」

「その、左腕は魔力がはたらいてるんだよな」

ギルの視線は興味本位ではなく、聞きづらそうながらも、私の左腕に向けられている。

「魔力が宿っているのは、そうです」

多分、誰でも不審に思うだろう。体の一部が変化する魔法など、人間は使えない。異形に似ているが、異形は体の一部分に魔力を宿している訳ではない。

ギルは黙って私の腕を見ていたが、自分の赤い髪をくしゃくしゃに撫でて、立ち上がった。

「ごめん。お前が言いたくなったら言ってくればいいや」

手を差し伸べられて、私はどうしていいのか分からなかった。何もしないでいると、腕をつかまれて、体ごと引き上げられた。

「あ、ごめん、回復かける」

「いえ、どこも痛くないので」

ギルは頭に手をやって呟く。

「まあ、それならいいけど」

「これからどこに向かうんですか？　　というかどこですか、ここ」

「落ちるところまで落ちたから、多分底じゃないか？　落ちた方が早いって、シディの言う通りだったな」

私は今まで気付かなかったことに驚いて、叫んだ。

「シディは」

「俺も勢いで落ちたから反省してるけど、シディなら死にはしないと」

集中して付近の魔力を感じてみる。割と大きめの魔力がいくつかと、上にいる時も感じた、魔力が乱れる波形がはっきりと分かった。「魔力をくみ上げている場所がすぐ近くみたいです」

「最下部で正解かな。行こう」

ギルが歩き出すのに私はついていく。上とは違い、水が蒸発するような音がずっと聞こえていて、生暖かい水の粒がたちこめている。魔力をくみ上げている影響なのだろうか。

「あのさ」

ギルが振り返る。

「言いたくなかったらいいんだけど、お前のこともう少し聞いていい？」

「質問によります」

「うん、いいよ、それで」

ギルは歩調を緩めて、私のすぐ斜め前を歩く。

「今までどこで何してたの？」

「今までって、ここに来る前ですか？」

ギルは頷く。

「ここに来る前は、ほとんど戦闘訓練を受けていました。主に魔法で、体術も少し。武器は銃とナイフだけです」

「誰に？」

「父様、あ、いえ、トリニア大将に」

ギルは相槌を打つ。

「どこで？」

「皇舎の近くです」

「いつ頃から？」

「四年くらい前からです」

ギルは小さく四年前か、と繰り返して相槌を打った。言葉が続かなかったので、今度は私が口を開く。

「そういえば、異形の言葉が喋れるんですか？」

ギルは返事をして頷く。

「陛下も喋れるし、佐官以上と古株のブリューテ・ドウタは喋れるよ。逆に向こうも王族に近い奴らはこっちの言葉が喋れる」

「さっきは何て言ってたんですか？」

「立ち退いてくれたら殺し合わなくてもすむけど、どうだ？ って。まあ、念の為聞いただけ。そんなんで解決したら何千年も争ってないだろうしな」

ギルが足を止めると、目の前には鈍色の質感の扉があった。ノブ

はなく、真ん中に入った縦線で、両開きであることが分かる。ギルは扉に手の平をあてて前のめりになった。

「まあ、開かないよな」

手をかけるところがないので、引くことはできない。

「吹っ飛ばすしかないか」

ギルは私に下がるように言うと、扉へ手を向けて構える。

ふと、肌が粟立った。私の中の魔力が今まで感じたことのない揺らぎを示して、声を出そうとしたら両手を背後でねじり上げられていた。ギルが振り返り、私の名前を叫ぶ。

『無駄な魔力は使わないことだ。お前の仲間をもう一人預かってい
る』

知らない言葉が聞こえて、私は反射で左腕に魔力を集中させる。

『聞こえなかったのか』

つかまれていた両手を更にねじられて、私は声を上げていた。

「アリア、逆らうな」

ギルが叫ぶ。

『こつちに分かる言葉で話せ』

ギルが言うと、背後で笑みを含んだ声がもれた。

「これは失敬。異形と言葉が通じないのを忘れていた」

「シデイは生きてるんだろうな」

ギルが低い声を押し殺すと、靴音と共に体が引っ張られた。

「殺してしまつては意味がない。安心しろ」

左横を振り返ると、白い髪に白い翼の生えた異形の青年がいた。

先程の異形は全員背中に翼が生えていたが、この異形は左腕の肘から先がそのまま鳥の翼になっている。

異形は私の後ろ手を引っ張ってギルの横を通りすぎると、鈍色の扉に手をかざして中へ入っていく。

内部はホールのようになっており、床のタイルの目地から薄緑の光が立ち上っていた。中央には緑の光が満ちた噴水のようなものがあり、中に人の背丈の二倍程もある結晶体が浸かっていた。形は水

晶のようで、床と同じ淡い緑の光を放っている。

気付けば、背中に羽根の生えた異形が中に続々と入ってきていて、ギルは異形の一人に手の平を向けられながら結晶体の側で止まった。私の隣にシデイがつれてこられて、横目で見ると、気を失っているようだった。魔力を感じるから、生きてはいるはずだ。

「で、何をなさるおつもりで？」

ギルが口を開くと、異形達の間にも流れる空気が張りつめて震えたのが分かる。

「まあそう急ぐな」

私の後ろ手をつかんだままの青年が言う。

「どうせ殺すなら魔力を抽出してから死んでもらおうと思ってな」

ギルは目を見開いて、弾かれたように結晶体を見上げる。

「完成させたのか」

異形は答えず、笑った。

「そこにあるのは大気から魔力を凝縮した液体と結晶だ。自己の器より大きな魔力に触れば、器は壊れて中身が溢れる。つまり体が魔力を収めきれず、壊れて魔力の中に溶けるということだ。お前達にはそこで溺れ死んでもらおうと思うのだが、どうかな」

「こんな浅い噴水で溺死なんて滑稽だな」

「大丈夫だ。触れた瞬間に全て終わる。理論上はな」

ギルの金色の目と、目が合った。その一瞬、ギルの思考が頭の中に焼かれたように直接伝わってきた気がした。

「理論上はだろ。それならまず自分で試してみやがれ」

ギルがジャケットの内側から銃を抜く。それを合図に私は叫ぶ。

『ワプー』

背後で呻き声が上がリ、私は腕を振りほどく。広範囲に撃つたつもりだったが、片翼の腕を持つ異形は私に手の平を向けて構えていた。

『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願い この視の先を破壊する
ガヤト』

『世界の終わり 黒に包まれ 鳥に願い この視の全てを飲みこむ
マヴェオ』

体勢を崩しながら、透明な衝撃波を黒い球体で打ち殺す。床から反動をつけて駆け出して、ジャケットの内側、左脇のホルスターから銃を抜いた。安全装置を弾いて、左手も右手の上から握る。シデイを脇に抱えたまま動けないでいる異形の目の前へ飛びこんで、喉元に銃口を押し当てて、撃った。

異形の首が半分千切れて、血が吹き出す。戻しそうになる程濃い、血と火薬が混ざり合った匂いに、私は息を止めてこらえて、すぐに支えを失ったシデイの体を受け止める。

異形の体力は人間と変わらない。シャワーのように降り注いだ血は、ぬめりけがあつて温かく、赤いのだと、今更思った。

空気の震えを感じて背後に銃を向けるが、狙いをつけるより早く、私は胸を蹴られて床を滑った。起き上がるより前に、銃を持ったままの右手をつかまれて引き上げられる。白い髪の異形が、私を見下ろしていた。

離れた場所から銃声が聞こえた。ギルが他の異形を一手に引き受けている。私がシデイを守らなければ。

「中々油断ならないな」

異形の手にかがこもる。引き金を引くより早く、右手に感じたことのない痛みがあつて、私は、生まれて初めて、痛みで息ができなくなった。右の手首が異形の手の中で曲がらない方向へ曲がっていて、銃を取り落とした。

「女だからと思っていたが、所詮異形の女だ。お前からしよう」
異形が私を引きずっていく。私は歯を食いしばれずに呻いた。経験したことのない痛みに息が継げず、全身から汗が吹き出し、体が痛いと言ってくる。右手の痛みと共に左手の指先から熱が失われていく。

ギルの声が聞こえて振り向くと、私はようやく頭の片隅で思考する余裕を取り戻した。声は出せなかった。けれど、私の考えが正し

ければ大丈夫だと、心の中で繰り返す。

異形は噴水の前で私の体を抱え上げた。これから落ちる液体の魔力を背中に感じる。

「お前が初めての有機物だ」

背中から感じるに、魔力の波形も穏やかで、そんなに悪いものでもない気がする。

「どうなっても、知らない」

私の咳きを異形は一笑に付す。

「溶ける」

背中から放り出された時、ギルが私の名前を叫ぶ声が、聞こえた。水音が聞こえて、目の前が薄緑色の揺らぎに包まれる。沈む程深くはなかったはずなのに、どういうことだろう。魔力の流れが水のように体を通り抜けていく。やっぱり思った程悪くない、むしろ心地いい。抗えないとここで本当に溶けていくのだろう。でも、知っている。私は抗える。

左腕から力を抜くと、腕が鼓動する。この安らかな場所には何て似合わない。痛みと共に左腕が自分の感覚から遠ざかっていく。右手の痛みは消えていたけれど、左腕の痛みは、消えない。

最初から分かっていた。私の左腕にいるのは、全てを飲みこむ、黒い鳥なのだと。

水が沸騰するように気泡に包まれて、視界が薄緑から白に塗りつぶされる。手を伸ばして、へりのようなものに手をかけた。絵に色がついていくように、景色が戻ってくる。

噴水の側では白い髪の異形が、遠巻きには背中に翼の生えた異形達が、ギルが、目を見開いてこちらを見ていた。

噴水の中の液体はほぼなくなっていて、見上げる程だった結晶体は粉々に砕け散っている。左腕に伝っている魔力がいつもより多いけれど得た魔力がそのまま定着する訳ではない。食物と同じで、左腕が食った魔力はいずれ消化されてしまうのだ。

私は噴水のへりをまたいで、濡れて頬に張りついている髪を払っ

た。

「なぜ」

白い髪の異形が我に返ったように叫ぶ。

「なぜ溶けない。あの量の魔力を収めて耐えられる体など、この世に」

異形の視線が私の左腕で、止まった。

「お前、いや、そんな。そういう、ことなのか？」

異形の声は震えていた。異形の左腕の翼と、私の翼は似ている。けれど私の翼は黒く、魔力そのもので実体がない。私は白い髪の異形の側へ歩み寄った。誰も動かず、一言も発さず、私の靴音だけが響いている。

白い髪の異形の前に立つと、異形の唇は色を失って震えていた。左腕が、鼓動と同じ速度で、内側から一撃、また一撃と殴りつけられているように痛む。これから、どうなるのか分かっている。それでも、私は。

異形の唇が開いて膝が崩れ落ち、何かを言う前に、私は左腕を振るっていた。黒い魔力の羽根が舞い散って、異形の体を黒が覆う。異形の形をした黒は段々収縮していつて、花が散るように細かく飛散した。

それを合図に、空間に悲鳴が満ちて異形達が方々へ散っていく。逃がさない、逃がしたら、私は帰れない。部屋の出口へ集まっている異形の元へ走る。

名前を叫ばれて、左腕を中心に体が後ろへ思い切り引つ張られた。驚いて振り返ると、ギルが、私の左腕を、黒い翼をつかんでいた。ギルの表情は悲痛そのもので、私の胸の中に後悔が押し寄せる。

私は異質だ。人間でも異形でもない。けれどたった数時間前に会っただけのこの人は、私を少なからず受け入れてくれた。だから、今嫌われてしまうことが、とても、悲しい。

「痛いんだろ、もういい」

ギルは叫ぶ。私は耳を疑った。何を言っているのだ？ 私の腕が

痛むからやめると言っているのか？　ただ異形を皆殺しにする得体の知れない力を不気味がっている訳ではないのか？　意味が、分からない。

けれど私は眠るように、体から力が抜けて、少しだけ遅れて意識が遠ざかっていくのを感じた。ギルの腕が崩れ落ちる私の背中をとらえて、私はギルの顔を仰いだ。

ああ。この人は一体、何を思っているんだろう？

この気持ちを表す言葉

2 この気持ちを表す言葉

誰かが私の目の前で喋っている。

茶色いブーツに薄い布でできた白いタンクトップとズボン、白い素肌に金色の腕輪をたくさんして、髪は毛先の跳ねた白っぽい金髪、目は若葉のような緑色だった。

とても美しい顔をしているけれど、体つきと、先程から聞こえている声で男性だと分かる。歳は私とそんなに変わらないように見えるから、二十歳前後だろう。一度見たら忘れられない印象なのに、目を離すとすぐに記憶が曖昧になる。

男性は何かに気付いたように声を上げる。

「これなら通じるだろ」

男性の声が、初めて意味のある言葉に聞こえた。男性は眉を寄せ、こちらに近寄ってくる。

「聞こえているなら返事をしろ」

「聞こえてます、けど」

男性は満足そうに口の端を上げる。視線が上から下へ動いて、私を眺めているのだと分かる。

「誰ですか」

男性は私と目を合わせて、おかしそくに笑った。

「今日は試しに見に来ただけだ。詮索なら次にしろ」

私は眉を寄せる。

「時間だ」

私はいつも枕元に置いてある懐中時計を探った。右手に違和感があつて、見ると白い包帯でぐるぐる巻きにされている。それだけならまだしも、手首に添え木がされているようで、物がつかめない。

指先だけで懐中時計を開いて見ると、ああ、そういえば今は夢

だったのかと思い出した。盤面は六時半を少しすぎている、薄暗いから多分夜だと思う。

上体を起こして部屋を見渡すと、いつも自分が寝起きしている部屋ではなかった。一人分の部屋にしては広く、チェストと机が綺麗に並んでいて、大きな窓にはレースのカーテンが引かれ、ベランダごしに木の上半分と月が透けて見えた。

記憶をたどる。思い出すと、私が最後に見たのは動力炉でのギルの顔だった。捕まったのか、助かったのか。

右手に巻かれた白い包帯を見ると、異形を撃った瞬間を思い出してしまつて、頭から血が引いていく感覚がした。まずいと思つてめまいを覚える前に横になつて、深呼吸を繰り返す。最近は落ち着いてきたと思つたが、それでもないらしい。一番頻繁に起きていたのは、四年前だ。

遠ざかつていた体をようやく自分のものとして認識できて、私はゆっくり上体を起こした。その時初めて、サイドテーブルの水差しの下に挟まれた紙片に気付いた。

『目が覚めたら薬を飲んで下さい。七時から戦勝パーティがあります。もし体調がよければ出席して欲しいとのことです。(あたしは寝てる方をお勧めするけど。)着替えはチェストの中に入っています。シディ・ビジュネ』

紙片を開くと、綺麗な字で書かれていた。シディも、助かったのだ。私は紙片を見つめたまま、胸に手をあてて、深く息を吐いた。

支度を終えて廊下に出ると、見知った皇舎の中だった。赤い軍服の胸ポケットから懐中時計を引き出して見ると六時五十五分で、中央のホールだったら急げば間に合うだろう。右手の添え木のせいで着替えに手間取ってしまった。噴水に投げこまれた時の魔力で治っているはずだが、念のためだろうか。体はどこも痛まないし、左腕もいつも通りに戻っている。

白い包帯が仰々しい右手を眺めながら歩いていると、高い声に名

前を呼ばれた。見ると、正面からシデイが小走りに私の方へ向かってくる。

「様子を見に行こうと思ったのに。平気なの？」

私と同じ赤い軍服のシデイは、走って乱れたボブの金髪を頬から払う。

「平気です」

「敬語抜きでいいから。色々聞いたけど同い年なんですよ。ほぼ同期なんだから、面倒くさい」

私はシデイの勢いに押されて頷いていた。

「じゃあ、大丈夫」

「薬は飲んだ？」

「あ、忘れました、じゃなくて、忘れた」

シデイは腕を組んで私を睨む。

「まあいいか。動けるんだったら何かお腹に入れた方がいいし。お酒は飲んじゃ駄目だからね」

シデイが今しがた来た方へ引き返していくので、私は横並びに歩いていく。

「でも、痛み止めでしょう？ 別に痛くないし、動かせると思う」

私はシデイの前に右手を差し出す。今は添え木に固定されているから手首は動かせないが、指は動く。

「そんな訳ないでしょ、回復かけてないのに。って、今かけるから手、貸して」

私は手を引いて首を振る。

「あの、動力炉で魔力の水の中に落ちたから、多分治ってると思う」「意味が分からないんだけど」

「魔力の水の中に落ちて魔力が体の中を通ったから、再生が促進されたというか、ノゼリオ（回復呪文）と同じ効果なんだけど」

シデイは眉をひそめたが、諦めたのかあまり納得していない顔で二、三度頷いた。

「あんたが痛くないって言うんだったらいいけど。あと、体内の魔

力を整える薬。あなた、その凝縮された魔力の中に落とされたんでしょ？ あたしは見てないけど」

「噴水に満ちていた薄緑色の液体のことだ。あれに落ちるということは、普通の人間なら体が膨大な魔力を収められず、体が壊れて魔力に還元される。私はあそこにあつた魔力より、体が収められる魔力の方が大きかったというだけの話だ。」

「今は、多分、大丈夫です。あ、大丈夫」

「無理に直さなくてもいいけど」

私は首を振る。

「今まで話せる人がそんなになかったから、いいの、嬉しいから頑張る」

シデイは珍しそうに私の顔を見て、笑う。

「あなた、変」

「ど、どうして？ どこが？ 言ってくれば直すから」

「別に直して欲しいとかそういうのじゃない」

「ホールの入口にいる警備の兵士に敬礼して中に入ると、既にパーティは始まっていて、皆自由に立食していた。戦勝パーティだといふから、この前には陛下の言葉があつたはずで、聞けなかったことが残念だった。」

「黒い軍服の中に赤い軍服がちらほら混じっているのが見えて、その内の二つがこちらに近付いてくる。」

「アリア」

「グラスを持ったギルが足早に駆けてきて、もう一人、知らない男性がゆっくりついてきた。」

「大丈夫か？」

私は返事をして頷く。

「連れてきましたよ。」ご指示通りね」

「シデイが投げやりに言うと、ギルは困ったように髪をかき混ぜる。俺に当たるなよ」

「分かってますよ。まったく、負傷者をパーティに引きずり出すな」

んて何を考えてるんだか」

「何の話ですか。あ、何の、話？」

言い直してシデイを見る私を、ギルが不思議そうな目で見ると、

「友達になることにしたんですよ」

シデイが言うと、ギルは不思議そうな顔のまま相槌を打った。

「陛下ができればあんたを連れてきて欲しいって言ったの」

シデイは気に入らないようだが、私にとっては陛下に気にかけてもらえるのは嬉しいことだった。

「多分、陛下は私の体調を分かっているんだと思う」

「分かっているに決まっているでしょ。報告したんだから」

「そういうことじゃなくて、もっと根本的な、体のことというか」
シデイが眉を寄せる。

「アリア、あんた本当に陛下と、そういうあれなの？」

そういうあれとは何だろう。今度は私が眉を寄せる。ギルを見ると、複雑な表情で固まっていた。その後ろで、先程ギルについてきた知らない男性が声を殺して笑っていた。男性は私と目が合うと、微笑んでギルの背中を叩く。

「ギル、紹介」

ギルは気付いたように振り返る。

「あ、ええと、俺の同期」

「レイジ・アヤセです。レイジって呼んでね。アリアちゃん」「先輩」

シデイが低い声で語尾をかき消す。

レイジ・アヤセはギルよりも頭少し飛び抜けていて、黒い髪に黒い目をしていた。黒髪はよく見るが、目まで黒いのは珍しい。緩くくせのある髪が赤い軍服によく映えていた。

「何、シデイ、やきもち？」

「蜂の巣にされたいようですね。この子に変なことを吹きこまないで下さい」

ようやく私は自分が名乗っていなかったことに気付いた。

「アリア・トリニアです」

レイジは満足そうに微笑む。

「うん、ギルから色々聞いたよ。トリニア大将の娘さんなんだってね。とっても強いっていうからもっとなんか感じた感じの子かと思っただけど、可愛いね。小さくて」

小さいとは、背のことだろうか。確かに私はシデイより背が低い。よく見ると目の色違うんだね。左が緑で右が、青か」

レイジの顔が近付いてきて、私は反射で一步後ずさりした。

先輩」「レイジ」

シデイとギルの声が重なる。

「何だよ、ギルまでやきもちか」

「やめる気色悪い」

ギルが叫ぶ。

「冗談。俺だつて嫌だよ。お気に入りの子には目印つけておかないと取られちゃうぞ。たとえば俺とかに」

「それ、相手もお前を気に入ったらの話だろ」

「じゃあアリアちゃん、一緒に中庭でも行こうか」

「先輩、何でこの人連れてきたんですか」

「勝手についてきたんだよ。俺のせいじゃねえ」

「楽しそうだな」

外側から投げられた声に振り向くと、そこにはマントをはおり、皇帝衣に身を包んだ陛下が微笑して立っていた。流れる空気が一変して緊張する。いつからいたのか、まったく気付かなかった。

陛下はおかしそうに吹き出して口元を押さえる。

「そんなにかしこまらなくていい。先も伝えたが、ギル、シデイ、アリア、お前達の活躍は見事だった。レイジ、お前も前線よく戦ってくれた。感謝している」

皆口々に礼を返す。

「アリア、体調はもういいのか」

私は言いかけた言葉を一度飲みこんで、はいと返事をした。

「呼びつけておいて何だが、無理はしないようにしなさい。では、邪魔をすまなかつた」

陛下が離れていくと、誰からともなく息を吐き出す音が聞こえた。
「うわあ、俺明日殺されてるかも」

レイジが深刻な顔をしてため息をつく。

「よく分かつてるじゃないですか。日頃の行いですね」

「というか陛下がライバルなんて反則だろ。若いし、金持ちだし、愛人の噂もあつたけど皇帝だし。ギルと同年だっけ？ それなのにこの差は何だ、なあギル」

「お前の妄想なんて知るか。あと陛下は二十三で、俺は二十歳だつての。それより、笑つてるところ、初めて見た」

ギルが私の方を見る。確かに陛下と会えて嬉しかったから、笑つていたと思う。

「私、笑つたことなかつたですか？」

「初めて見た」

なぜかギルは嬉しそうに微笑んだ。

「ふうん、じゃあ会つてすぐ見れた俺ラッキー。女の子は笑つた方が可愛いんだから、もっと笑うといいよ。あ、シデイもね」

「無理に付け足さなくていいです」

「冷たいなあ。そんなんじゃすぐお婆さんになっちゃうぞ」

「先輩、発砲許可をください。今すぐに」

シデイがギルの方を向く。

「シデイ落ち着け」

ギルが私の方を向いて、笑った。

「笑ってくれた」

私は多分、嬉しいのだった。陛下に会えたのも嬉しかったけれど、今までこんなにあくさんの会話に入ることがなかったから、話の中にいられるというだけで、満ち足りる。

「何がおかしいの、アリア」

シデイが私の頭をかき回していく。

「う、ごめんなさい」

「冗談よ。冗談通じないの、あんた」

シデイは呆れたように言った。

「陛下ー、シデイがアリアちゃんをいじめてますよー」

「窓から飛び降りて来て下さい今すぐに」

シデイは冷たい目でレイジを一瞥する。

「さて、飲み物もらいに行きましょうか。せつかく来たんだから食べるなり飲むなりしないと」

「あ、じゃあ俺全部取ってくるよ。もうないし」

ギルが中身の少なくなつたグラスを振る。

「じゃあ、私も行きます。一人で四つは危ないので」

私が言うと、レイジが手で私を制す。

「アリアちゃん片手使えないんだろ？」

右手を見て、思い出した。そういえば包帯でぐるぐる巻きにされていたのだった。

「でも、痛くないし、指は動くので」

「いいよ。俺が三つ持つから」

私の言葉にギルが重ねる。

「む、だから俺も行くって言おうと思つたのに」

「先輩は私とご飯係にして下さい。手は五つもいりません」

レイジは不満そうに腕を組んで頬を膨らませる。

「まあギルと一緒にシデイと一緒にの方がいいけどさ」

「いちいち喧嘩売らないで下さい。殴りますよ」

「で、二人共何飲む？」

ギルが言葉を挟む。

「申し訳ないんですが、本調子じゃないのでジュースで。なかつたら水でもいいです」

「俺はカルーアミルクがいいなあ」

「カルーアあつたかな。まあなかつたら適当に持ってくるよ。アリア、行こう」

「あ、アリア、あんたもジュースにするのよ」

振り返ってシディに頷いておいた。私はギルに追いついて横に並ぶ。今までちゃんと見ていなかったが、テーブルクロスの上には色々な種類の料理が並び、軍服姿の兵士達が老若入り乱れて談笑していた。

「体調は本当に悪くないの？」

私は頷く。

「変なところは特にないです。そういえば、あの後どうなったんですか？」

「あの後って、動力炉？」

私が頷くと、ギルは思い出そうとするように上を向く。

「あの後、異形が逃げていって、俺は救助の応援を呼んだくらいかな」

「逃がしたんですか？」

「向こうはもう戦意喪失してたし、俺だけじゃあの数は無理だった。そう言われてみればそうだった。私が白髪の異形を殺してしまったから、彼らは戦う意志を失っていた。」

「私、おかしくなかったですか」

ギルは首をかしげる。

「どういうこと？」

「倒れた後、起き上がりたりしませんでしたか？」

「しなかつたけど、何で？」

私は首を振る。

「何もなかったならいいんです」

ギルが立ち止まったテーブルには、飲み物が入ったグラスが整然と並んでいた。

「俺三つ持つから、アリアは自分の選んで。ジュースは多分こっちは側にはいたエプロン姿の兵士に尋ねて、ぶどうジュースを手にとった。ギルは両手で器用に三つグラスを持って歩き出す。」

「手は、痛いのか？ その、どっちも」

ギルが左腕のことを尋ねているのだと分かった。

「どつちも痛くないです。特に右手は治ってると思います。」

ギルは神妙な顔で頷く。

「あのさ」

「何ですか？」

「言いたくなかったらいいんだけど。その、本当に陛下と結婚を前提にしているの？」

私の頭の中に一瞬、疑問符が浮かぶ。

「そういう気はないですけど、どうしてですか？」

「いや、かなり親しそうだから。って、それはトリニア大将の娘だからなのか」

最後の方は独り言のようだった。

「陛下には小さい頃からお世話になっていたので、そう見えるんだと思います」

「トリニア大将に挨拶に行かないの？」

「ちよつと、迷っていました。こういう時は行った方がいいんじゃないでしょうか」

ギルは思いつめたような表情で持っているグラスを眺めて、私の方を向く。

「あの、本当に失礼を承知で言うんだけど、トリニア大将に娘がいたって、今回初めて聞いたんだ。だから、アリアは本当に」

「アリア」

明後日の方向から名前を呼ばれて、私は振り向く。

黒い軍服を着た薄茶色の髪の男性が、こちらに歩いてくる。五十歳も間近だというのに体に無駄な肉はついておらず、立ち振る舞いも颯爽としている。

「父様」

私は反射で呟いていた。

「体調はもういいのか。陛下が無理矢理呼び出したそうだな」

父様は笑いながら私の側で立ち止まった。陛下に対して「冗談が言

えるのは、先代の皇帝からも信頼が厚かった父様くらいだと聞いた。父様にとつては陛下のことも生まれた頃から知っているから、息子のよくな存在なのかもしれない。

「体調は大丈夫。挨拶に行こうか迷ってて」

「来てもらえないとは淋しいな。今回初陣ながら大活躍だったそうじゃないか。なあギル」

父様がギルに視線を向ける。

「ええ、彼女のおかげで助かりました」

「アリアは、強いだろう。おまけに可愛い。まあお前にはやらんがな」

父様は笑ってギルの肩を叩く。

「お言葉通り、私にはもったいないです」

ギルは困ったように微笑んだ。

「まあ今後も面倒をみてやってくれ。アリア、遅くならないうちに戻るんだぞ」

私は返事をして、去っていく父様の後ろ姿を見ていた。ギルに声をかけられて、また横並びについていく。

「そういえば話の途中でしたね」

「いや、やっぱりいいや」

ギルは先程と同じように、今度は私に向けて困ったように微笑んだ。気になると言おうとしたら、シデイとレイジが円いテーブルの側で手招きしているのが見えたので、口をつぐむ。テーブルの上には誰がそんなに食べるのか、結構な量の料理が取り分けられていた。

「はいシデイ、レイジはこっち」

ギルは両手で持っていたグラスを渡す。

「じゃあギル、乾杯よろしく」

ギルは面倒そうな目でレイジを見る。

「言い出したのにやらないのかよ。まあいいや。みんな無事帰ってこれて、お疲れ様。乾杯」

「短いな。乾杯」

「やらせといて文句言つな」

言いながら、でも楽しそうに、ギルは二人とグラスをぶつける。私も目で呼ばれて、ギルとグラスをぶつけた。こういう乾杯の仕方は初めてなので、合っているか分からないが、二人にもグラスを合わせて中身を飲んだ。

「先輩、これお酒入ってますよ」

シデイは今しがた口をつけたグラスを見る。

「え、嘘、ごめん。アリアのは？」

「入ってない、と思いますけど。お酒飲んだことがないので、味が分からないです」

「へえ、お酒飲んだことないの？ これはちゃんとカルーアだったから飲んでみる？」

レイジは笑顔で、牛乳にココアを混ぜたような色合いのグラスを指差す。

「お前は黙ってる。ちょっと」

ギルの手が私が持っているグラスを取ろうとして、止まる。

「あう、えっと、じゃなくて。シデイ、ちょっと飲んでみて」

「何だ、ギル、今ためらったな？ せつかくの間接ちゅーのチャンスを逃すなんて男じゃないぞ」

レイジが意地の悪い笑みを浮かべながらギルをのぞきこむ。

「お前本当に口を糊付けしろ。じゃなきゃ窓から飛び降りろ」

「ちなみに俺なら絶対にためらわない」

「気にしなくていいから」

シデイが言っただけのグラスを取って中身を飲む。

「アリアのはジュースですね」

「そっか。ならよかった」

ギルは安心したのか、笑顔を見せる。

「酔っ払ってるアリアちゃんも見たかったなあ」

「お前が酔っ払ってさっさと退場しろ」

「カルーアだけじゃ酔えないって」

「もうウォツカを原液で飲んで喉を焼け。それが一番いい」

私は無事ジューズ認定されたかどうかジューズを飲んで、隣のシデイを見た。

「ジューズ持つてくる？」

私が言つとシデイは首を振つて、ギルが持つてきたお酒を飲んだ。「いい、飲めない訳じゃないし。アリアももし飲みたいんだったら、体調戻つてからにしなよ」

「お酒つてそんなに危ないの？」

「あんた本当に箱入りなの？」

逆に聞き返されてしまった。

「今までほとんど陛下と父様としか喋つたことないから、知らないことは多いと思う、けど」

シデイは訝しげに相槌を打つ。

「まあ、お酒はある意味危ないかもね」

でも陛下と父様がお酒を飲んでいるところを見たことがあるが、そんなに危ないものには見えなかった。シデイに言つと、何事か考えるようにまたグラスを口に運ぶ。

「あの二人はね。私的に飲んだことはないから分からないけど。まあ世の中にはお酒に泣いたり、笑つたり、後悔する人がたくさんいる訳よ」

「アリアちゃん、あーんつてしてよ。むしろ俺がしてあげるからこつちおいで」

「ちなみに先輩は飲んで酔わないタイプ。というか普段から酔つ払つてるようなものだから変わらないけど。断つていいから」

どう反応しているのか分からずに手招きしているレイジを見ていたら、ギルがレイジの顔の前にスプーンを突きつけた。

「や、め、ろ。アリアにやらせるくらいなら俺がやる」

「うわ、気持ち悪」

レイジは本気で嫌そうな顔をして一步下がる。

「俺だつて願ひ下げだ。お前からアリアを守るために仕方なくだ」

「シディならいいって?」

「いいですよ」

シディが表情一つ変えずに言うと、ギルとレイジがこちらを見て完全に動きを止めた。

「ああ、俺、やっぱり今日殺されるんだ。もうおしまいだみんな今までありがとう」

「シディ、冗談でも言っていていいことと悪いことがあるんだぞ」
レイジとギルが口々に言う。

「結局受けても断つても同じなら聞かないで下さい」

私は思わず笑ってしまった。

「私もギルがレイジにご飯食べさせてるところ、ちょっと見てみたいです」

二人が今度は私の方を見て、動きを止める。

「あああ、レイジとか言われて嬉しいけどアリアちゃんが一番えぐいよ」

「アリア、冗談でも言っていていいことと悪いことがあってだな」

私は、必死に私を諭そうとしているギルの言葉をくすぐったい気持ちで聞いていた。

結局、会話の応酬は夜遅くまで続き、シディが部屋に戻るというのに合わせて解散になった。ギルとレイジが皇舎が分かれる前まで送ってくれて、途中からはシディと二人になった。私の部屋は数時間前に目覚めたところだそうで、シディの部屋は隣らしい。いつもなら廊下も薄暗くなっている時間なのだが、今日はまだ明かりがついている。

靴音混じりに名前を呼ばれて、私はシディへ振り向いた。

「今の勢いで聞きたいだけだから、言わなくてもいいから。あんだ、陛下と血が繋がってるの?」

多分、もう顔に出してしまっただろう。今から取り繕っても自然には振る舞えない。

「内緒にしておいて欲しいんだけど」

「あっさり白状してどうすんの。ってあたしが言えた義理じゃないか。一応うつかり口は滑らせないように努力するけど」

「どうして分かったの？」

「何となく似てるから。目とか」

確かに私の右目は陛下と同じ色の青だ。

「でも、片方は違うのに」

「色もそうだけど、目の形とか」

そんなに似ているだろうか。自分では分からなかったが、人から見ると似ているのかもしれない。

「トリニア大将の養女っていうことでいいの？」

私は頷く。

「いつから？」

「四年前、かな？」

「何で？」

言葉につまった私を見て、シディは踏みこみすぎたと思っただらしい。

「ごめん、聞きすぎた」

「あの、そういう訳じゃなくて、私もあんまりよく分かってなくてただ」

言っただけいけないことを口に出しそうになって、寸前で止めた。

「陛下が、父様、じゃなくて、トリニア大将の娘になりなさいってそれじゃ、駄目？」

「別にいいよ。駄目も何もあたしが無理矢理聞き出したんだし。でもまあ、これで箱入りの理由が少し分かったかな。あんた、立場的にはお姫様なんじゃないの？」

確かに考えてみればそうなのかもしれない。けれど自分を姫だと思ったことは一度もないし、陛下もそういう扱いはしなかった気がする。

「でも陛下はブリューテ・ドウタに入って戦いなさいって言ったから、お姫様ではないよ」

「まあ、あたしもあんたをお姫様扱いするつもりはないけど。同じ仕事仲間として頑張ってもらわないと」

喋っている内に部屋の前について、それぞれの扉に手をかける。

「じゃあ、明日。ちゃんと寝なよ」

淋しかったけれど嬉しくもあつて、私は笑ってシデイに手を振った。

まただった。私は、つい数時間前に夢に出てきた男性と向かい合っていた。空間は先程と同じ真っ白で、目の前の男性しか見えない。

男性は私を値踏みするような目で上から下まで眺め回す。

「聞いていたのと違うな。擬態してるのか？」

「今度は何ですか」

「別に。暇だからもう一度お前を見に來ただけだ。お前、黒の鳥を飼ってるんだろう？」

男性はさして重要なことでもなさそうに私の左腕を指差す。私は、何も考えないように、黙っていた。

「まあいい、戦えば分かることだ。お前には最終的にこちら側に来てもらうしな」

「こちら側って何ですか」

「零間側れいげんについてもらう」

零間とは人間と対になる、異形の本来の呼び方である。

「何でそんなことあなたに決められないといけないんですか。誰だかも知らないのに」

男性を睨むと、男性は気分を害したように唇を歪めて、攻撃的に笑った。

「何なら今連れていくか？」

頬に風が流れたような気がして、目を開ける。もう一度空気の流れを感じて、反射で上体を起こす。

人の背丈以上ある窓が開いていて、揺らめくカーテンの前に、夢で見た男性がもたれて腕を組んでいた。高く昇った月の光が、色素

の薄い金髪を透かしている。なぜ夢の中の人がいるのか疑問に思う前に、男性の体から向けられている押し潰されそうな程の魔力に、肌が粟立つ。銃は手元に置いていない。呪文に意識を集中させる前に、男性が一步踏み出してくる。

目をそらせなかった。多分魔力を集中させた瞬間に、私は何らかの形で死んでいるだろうと思った。男性は歩いてきて、ベッドの前で止まり、私の首を包むように、片手で触れた。

今何か撃たれれば、間違いなく死ぬ。

「汗をかいてる。怖いのか」

指先にこめられた魔力とは裏腹に、男性の声は子供に話しかけるように柔らかかった。歯をかみしめていないと、声を上げてしまう。それでも、胸元をつかんだ指は震えて冷たくなっている。けれど、どちらにしろ死んで黒の鳥を野放しにするなら、今開放してしまっただ方が、いい。

男性は視線を外して、つまらなそうに部屋の扉に目をやった。

「まあいい。時間だ」

瞬間、私は全ての制御を外した左腕を叩きつけるようにふるった。つもりだったが、電気之音と共に体が痛みで痺れて、天井を仰いでいた。

「お前がいくら鳥を飼っていても、明らかに経験不足だ」

男性は気付いたように笑みを浮かべて、私の顔の横に手をつく。

「これが鳥か」

私は黒色の翼の形に変わった腕を動かそうと力をこめるが、麻痺しているのか、感覚がない。

「安心しろ。今お前をどうこうするつもりはない」

「さっきと、言ってることが違う」

「大事になると面倒なだけだ」

男性はもう一度扉に視線を向ける。私の耳にも、廊下を叩く靴音が聞こえてくる。

蹴破られるように開いた扉の向こうに見えたのは、肩で息をして

いるギルだった。男性は私の横から手を離して、ギルの方を向く。

「網の主はお前か」

男性が言葉を投げると、ギルは乱れた息と共に「そうだ」と言った。開け放たれた扉の向こうから騒々しい物音がして、ギルの後ろにシデイが現れる。パジャマにガウンをはおっただけの姿で、驚いた表情でこちらを見ている。

男性は特に表情を見せず、ギルは男性を睨んで、互いに距離をつめない。

「何者だ」

ギルが言つと、男性は聞こえなかったかのように何も反応しなかった。

「目的は何だ」

男性は口元だけで笑う。

「今争うつもりはない。好奇心で来てみたら騒ぎになっただけだ」
「何でアリアを狙った」

男性は笑みを浮かべたまま、もう一度私の首をつかんだ。力は入っていない、けれど魔力の通った指先は驚く程冷たく、そこから全身の熱が引いた。

左腕の感覚は戻っている。でも、動いたら、殺される。

「てめえ」

『ワプラ』

男性がギルに向けて雷撃を放つ。光と音が炸裂して、目が戻ると、ギルは床にうつぶせに倒れていて動かなかった。「先輩」シデイがギルに駆け寄り、こちらを仰ぐ。

「さすがに騒ぎすぎだな」

男性は独り言なのか呟くと、私の首から手を離して、開けっ放しだった窓まで歩いていく。呻き声が聞こえて扉の方を見ると、ギルが床に手について、体を起こしていた。

「殺すつもりでやったんだが、意外と丈夫だな」

男性は意外そうな声をあげて、笑った。

「あれくらいでやられるか」

「まあいい、近い内に会うだろうしな。その時はあれを連れていく」
男性の緑の目と、目が合った。緑色の目はすぐにギルに向かう。

「あれは俺のものだ」

笑みを浮かべながら低い声で言い放って、男性はベランダから駆けるように飛び降りた。

「アリア」

静寂の後、ギルに呼ばれて、私はベッドから上体を起こそうとした。けれど支える腕から力が抜けて、またベッドに倒れこむ。シデイがギルにノゼリオ（回復呪文）を唱え、そのまま駆けてきて、ベッドの隣にしゃがみこんだ。

「そのままでもいいから。怪我は？」

私は首を横に振る。

「怪我はしてない。でも、怖かつた」

我ながら何を言っているのだろうと思ったが、本心だった。まだ指先の内側の方に、震えが残っている。シデイは私の手を取って、肩を軽く叩いてくれた。体温を感じたら左腕に痛みが戻ってきて、見るとまだ黒い翼の形のままだった。ギルが歩いてきたのが分かって、顔を向ける。

「大丈夫か？」

私が頷くと、ギルは私の左腕に視線を移して、自分が痛むかのよう目細める。

「ギルは？」

尋ねるとギルは笑って、手を開いたり閉じたりしてみせた。

「ちょっと痺れてるけど大したことない。回復ももらったし」

ギルは笑みを消してシデイに向き直る。

「陛下に報告してくるから、ここを頼む」

「私が行きます。先輩は休んでいて下さい」

「いいのか、そんな格好で」

シデイは薄いパジャマの上にガウンをはおっただけの格好だ。

「非常事態なんだから陛下も大目に見て下さるはずです」

「なら、任せる」

シディは立ち上がって扉のところまで歩いて行って、思い出したように振り返った。

「アリアに変なことしないで下さいね」

「するか。レイジと一緒にするな」

シディはおかしそうに微笑んで、廊下を蹴る足音と共に消えていった。

静かになると、ギルが息を吐き出す音が聞こえた。

「痛む？」

ギルはベッドの側にしゃがみこんだ。私はギルを見て、ギルの視線の先にある自分の左腕を見る。パジャマの肘から先が、鳥の翼の形をした流動する魔力に覆われている。パジャマの白とは対照的に、どこまでも、黒い。

「少し。でも、大丈夫です」

私は黒に包まれている腕の境目を握って、目を閉じる。外に出てこよととする自分ではないものの魔力を、自分の魔力で抑えこんでいく。腕を支配する私の魔力が上回ると翼は消え、私が魔力を解いてしまうと、黒の鳥に体も意識も取られてしまう。だから私が死ぬば体は黒の鳥のものになる。黒の鳥はただ全てを壊すことしか望んでいない。意思を通わすことはできないが、普段でも薄々と伝わってくる。

昔、私は一度だけ、黒の鳥に体を渡してしまったことがあった。意思は全て破壊に染められて、私はそれに疑問すら持たなかった。次に体を渡してしまえば、私はこの世の全てを壊してしまうだろう。次は、ないのだ。

腕を握っている手の甲に何か触れて、体が跳ね上がった。ギルの指が、私の手に触れていた。

「あ、ごめん、でもあの時もう少し楽になったかなと思って。手を当てるって、本当に気休め程度には効くみたいだし」

あの時とは多分動力炉で最下層に落ちた時だろう。そういえば確かにあの時も。考えていたら、鼓動と一緒に感じていた痛みが弱まっていった。黒い翼はろうそくの炎を息で消したように、揺らめいて消えた。

私は相当怪訝な顔でギルを見ていたのだろう。ギルは恐る恐る手を引っこめる。

「ごめん、痛かつ、た？」

私は首を横に振る。

「何かしたんですか？」

「何もしてないつもりだけど、何で？ あ、嫌だったらはっきり言ってくれた方が」

私は答えに一瞬つまつた。

「嫌ではないです、大丈夫です。触られた時、痛みが消えたような気がしたので。この間も、そうだったんですけど」

左腕の痛みは黒の鳥の魔力が溢れている証拠で、抑えこんでいる時は痛まない。普段は発現してしまえば抑えこむのに時間がかかって、少なくとも一瞬では収まらない。触れられるだけで痛みが消えるなど、今までに、ない。

「まあ、収まつたなら、よかった」

ギルは安心したように笑って、表情を引きしめる。

「すぐに悪いんだけど、いくつか聞いていい？」

私は頷く。ギルは机の側にあつた椅子を引いてきて、ベッドの前に座つた。私もようやく上体を起こして、床に足をつけてベッドに座り直す。

「さっきの男は知り合い？」

私は首を横に振る。

「あの、でも、そういえば戦勝パーティの前、夢の中に出てきました。それで、さっきも夢の中に出てきて、起きたらそこに、立ってました」

私は開け放たれたままの窓を指差す。

「夢なので、ただの夢かもしれませんが」

「いや、ただの夢ってことはないだろうけど。どんな夢だった？」

私は薄れかけた夢の記憶を反芻する。

「一回目は、様子を見に來ただけだって。二回目は、ええと、やっぱりもう一回見に來たって」

男性が放った言葉を思い出して、一度口をつぐむ。

「私を、零間側に連れていくって、言っていました」

ギルの金色の目が細くなる。

「異形か」

「でも、人間と見た目が同じでした。ああ、でも」

私は思い出して自分の言葉に対して首を横に振る。

「そういえば、一回目夢に出てきた時、確かに分からない言葉を、喋っていました」

私は動力炉で異形の言葉が分からなかったことを思い出した。

「十中八九、異形だな。奴らなら夢に干渉するくらいの魔力を持ってもおかしくない」

「でも、見た目が」

ギルは考えるように上を向く。

「ちよつと説明長くなるけど、聞く？」

私は頷く。

「まず、異形の生態から話すんだけど、生まれる過程は人間と一緒に、生まれた時は人間と同じ見た目をしてるんだ。成長する途中で、体の一部が変化する。時期は詳しく知らないけど、そこで背中が羽が生えたり、尻尾が生えたりする。これも詳しく知らないんだけど、異形は人間より成長が早くて、幼年期と老年期が短い。つまり青年期が長い。でも寿命は人間と同じくらい。体と頭が人間の六倍の速さで歳をとるって考えられてるから、異形は三歳で人間の十八歳と見た目も知能も大体同じになる。曖昧で申し訳ないんだけど、なにしろ異形と断絶してるからさ。今の話だって上層部と兵士の一部しか知らないし。一般市民は異形が人と少し違う形をしてるっていう

「ことくらいしか知らないんだよ」

私は頷く。

「私も少し教えてもらいましたが、ここまで詳しいのは初めて聞きました」

「誰に教えてもらったの？」

「父様に、あ、トリニア大将に、です」

ギルは頷いてそれ以上追及しなかった。

「で、肝心の擬態の話だけど、異形は生まれた時は人間と同じ見た目をしてるから、成長してから変化した部分を隠したり、人間と同じようにできるんだ。尻尾とかは魔力で消せるし、腕が羽だったら一時的に人間と同じ腕にできる。でも異形は基本的に擬態しない。自分達の姿に誇りを持ってると、敵対する人間に擬態したとも思っていない。だから今人間側には異形のスパイはいないことになっている。いない理由が奴らの誇りっていうのが皮肉な話だけだな」

私は頷いてパジャマの胸元を握る。

「じゃあ、あの人は異形なんですね」

「多分な。まったく、単身で敵の本拠地に侵入してくるとは、よっぽど自信があるのか」

ギルは苦々しい表情で付け足すように呟く。

「陛下は予想してたのかもしれないけど」

「どうしてですか」

「皇舎にいる間はここに結界を張っておけて。で、何かあったら駆けつけろ、と」

そう言っ下を指差す。

「この部屋にですか？」

言っギルは頷く。

「俺の魔力だと侵入を阻むまではできないから、侵入されたら分かる程度。あいつが綱って言ってただろ」

私は頷いた。少し色々なことがありすぎて、まだ頭が整理できていない。

「あいつに狙われる心当たりはある？」

私はギルの言葉でまた記憶の中に沈む。明言された記憶はないけれど、私に価値を求める理由なんて、数点しかない。

「はつきり言われた訳ではないので分からないんですけど、左腕が、欲しいのかもしれませんが」

ギルの目が開かれて、鋭くなった。金色の目は暗くなると、まわりから切り離されて一層際立つ。

私は男性の姿を思い返した。不意に、首筋をつかんだ指の冷たさが蘇ってきて、私は内側から震える指で胸の前を握りしめた。動力炉で対峙した異形には何も感じなかった。けれどあの人は本当に、生まれて初めて勝てないと、殺されると、思った。

「それは、腕だけ切り離して持っていきたいって意味じゃないよな。つて、ごめん。無神経だった」

ギルの手が頭の上に置かれて、驚いて体が跳ねた。「ごめん」ギルも驚いたように謝るが、手は離さない。ひとしきり頭を撫でた後、言った。

「怖かったな」

ああ、気付かれて、いたのか。指に震えは残っているけれど、握りしめているからそこまで分らないと思っていたのに。何だか泣きそうな気持ちになって私は目を細めた。本当に泣いたりはしなかったけれど。

「すみません、何だか、子供みたいで」

「あれ、いくつだっけ」

「ええと、十八、です」

「そんなもんじゃないの？ 聞いておいて何だけど、あれは誰でも怖いぞ」

頭を撫でてくれる手にあの人を思い出して、私は頷いた。指先の震えも収まってきて、胸の前を握りしめていた指をほどく。

「そういえば、今更ですけど髪型違うんですね」

ギルは首をかしげて、思い出したように声をあげる。今までずっ

とギルの赤い髪は束があつて、ボリユームが出ていたが、今はストリートに下りて前髪が少し目にかかっている。

「昼間は整髪料つけてるから。何もしてないとこんな感じ」

「男の人でも髪の毛に何かついたりするんですね」

ギルは難しい顔でうなる。

「トリニア大将もつけてる気がするぞ。俺のと種類は違ふと思うけど」

確かに記憶をたどると、父様も朝、髪をとかす時に何かつけていたよな気がする。

「でも、スーツなんですね」

ギルの服装はジャケットこそ羽織っていないが、ブリユータ・ドウタの平服である、白いワイシャツに黒のシヨルダーホルスター、黒のスラックスだった。

「たまたま寝れなかつたから着替えてなかつただけ。結果的にはよかつたけど」

「あ、ごめん、なさい。眠いですか？寝ますか？」

「いや、この状況で寝ろつておかしいだろ」

「そうですね先輩。その手は何ですか」

明後日の方向から声がして、ギルはすつとんきょうな叫び声をあげながら、私の耳元あたりに移動していた手を離れた。見ると、開けっ放しの扉のところにシディが立っている。

「お前、戻ってきたなら言えよ」

ギルは何かを取り繕うように叫ぶ。

「今戻りました。先輩が本当に変なことをしていないか確かめるために、足音は消しました」

「無駄なところに技術を使うなよ。別のところに使え、別のところに」

ギルはばつが悪そうに頭をかいて、椅子から立ち上がる。シディも扉のところから部屋の中に入ってくる。

「陛下には会えたのか」

「一通り報告はしてきました。結界は続けて張るようにとのことです」

「相手に心当たりは？」

「少し考えこんでる様子でしたけど、特に何も。慌ててる感じでもなかったです」

ギルはあまり納得していないように相槌を打つ。

「まあいいや。今日は解散。シディ、悪いけどここに泊まってくれないか、寝袋持ってくるから」

「分かりました」

「あの、一人でも大丈夫です」

私は会話に無理矢理言葉をねじこむ。

「いや、でも万が一あいつが戻ってこないとも限らないし、かといって俺がここに泊まるのも変だし、それに、怖いだろ？」

「怖くありません」

私は叫んでいた。自分でも驚く程強い声が出て、私も、二人も驚いたように目を開く。確かに怖いのは本当だが、今この場でそういう風に言われるのは、とても嫌だった。止まってしまった空気を戻すために言葉を探すが、喉から声が出てこない。

「先輩、お父さんみたいです。あ、トリニア大将みたいという意味ではなく、一般的なお父さんという意味です」

シディは言って、私が座っているベッドの横に腰かける。

「あんたが納得できないんだったら、ベッド半分貸して。そこで寝るから」

私はシディの顔を見て、体が熱くなって、かろうじて頷いた。

「はい。という訳で解散で」

「シディ、お父さんは地味に傷付くぞ」

「言葉の綾というやつです。すみません。明日、じゃなくて、もう今日ですね、会議八時からでしたよね」

ギルは頷く。

「分かりました。では、お休みなさい」

ギルは引き下がるように扉の方まで歩いていく。扉のところ振り返って、名前を呼ばれた。

「気分悪くしたんならごめん。ゆっくり休めよ。あ、シデイも」

シデイは返事をして、私も小さな声で返事をした。ギルの顔を見ることができなくて、扉が閉まる音を聞いて、口を開いた。

「ごめんなさい」

シデイは立ち上がって、開けっ放しになっていた窓の側まで歩いていく。

「別にあたしはどこで寝てもいいし、謝られる理由はないんだけど」
シデイは窓をしめて、レースのカーテンを引いて戻ってきた。

「先輩は戦場の勘は強いけど、人の気持ちはからつきだからね。でもあんたが心配なのは同じだから」

だから今は甘えていい、ということだろうか。

私は世界にとって最強で、最悪の鳥を飼っているのに、知り合っ
て間もない人達に守られている。男性が言っていたことを思い出す。
いくら鳥を飼っていても、私は結局本当に子供なのだ。

胸の奥が焼け焦げたようにくすぶった。この気持ちを表す言葉を、
私はまだ知らなかった。

あなたはあたしを助けられない(1)

3 あんたはあたしを助けられない

ギルが運転席で吐き捨てるように呟く。

「たく、陛下も人遣いが荒い」

「先輩、それデジャヴです」

「何？ 何の話？」

動力炉に移動する時に使った車は、今は動力炉から更に先にある地点を目指して走っている。運転席にギル、隣に私、後ろにはシレイ、その隣にはレイジが座っていた。四人乗りなのでこれで定員だ。「悪口じゃないからな」

ギルに振り向かれて私は頷いた。今聞くと本気ではなく冗談だと分かるので、特に咎めるつもりはない。

「何だよ、俺だけ仲間外れにして」

レイジが頬を膨らませる。

「つい数日前、まったく同じ言葉を聞いたってだけです」

「というか今更だけど、お前何で今回は同行してるんだ」

ギルが前方から目を離さずに言う。

「陛下に頼みこんだんだよ。アリアちゃんと一緒にいさせて下さいって。あ、シレイのことも好きだからね」

「別に無理矢理付け足さなくていいです」

「何でそれで承認されるんだ」

ギルが苦々しそうに呟く。

「冗談だよ。もうちょい真面目に言ったって。ギルは素直だなあ」

「うわ、馬鹿にしゃがって」

私は風にあおられる髪を押さえる。この間と走っている道は大体同じらしいが、今日は陽が高く昇っているので、まわりがよく見える。といっても荒野なので見渡す限り空しかなく、地面は黄土色の

砂と岩に覆われている。

私が異形だろう男性に襲われてから数日後、つい数時間前に行われた会議で陛下は言った。

「困ったことになった」

会議の出席者は前回とほぼ同じで、陛下、父様、ギル、シデイ、それにレイジ、私、他に黒い軍服の父様と同じ年代の男性達が数人だった。肝心の陛下といえば、困ったと言った割にはむしろ楽しそうな笑みを浮かべている。

「我々はこれから本格的に異形の駆逐を始める訳だが、まず、皆知っている通り動力炉の奪還と前線での健闘により、異形の防衛線は動力炉の先にある森を抜けた街まで下がった。このまま一気に森を抜けて攻めこみたい考えだが、丁度その森の手前に障害物が現れた」

「障害物とは何ですか」

レイジが柔らかい口調で尋ねる。陛下は吹き出したように笑って、レイジを見る。

「すまない、もったいぶりすぎた。遊牧民だ。いつも冬に来ていた一族があつただろう。あれがつい昨日森の手前に根を下ろしたと報告があつた。規模は大体百人だそうだ」

ギルとレイジが納得したように小さな声を漏らす。

「リウ族ですか」

「そうだ。あれが去ってからまだ半年くらいしかたっていない。異形との争いで進路を変えたのだろうが、このまま森の前に留まらねばは進攻に支障が出る。そこでブリューテ・ドウタに交渉を頼みたい」

「失礼ですが、陛下」

ギルが怪訝な顔で切りこむ。

「なぜ私達に交渉をお任せになるのか、理由をお聞かせ願えませんか」

陛下は鋭い笑みを浮かべて、おかしそくに笑い声を立てる。

「すまない、また試すような言い方をしてしまった。要はこういうことだ。知っているかもしれないが、我々は古くからリウ族と同盟を結んでいる。特産物をやり取りする代わりに、リウ族が異形に攻撃を受けた際、防衛に協力するという盟約がある。だが今回、一週間程前だが、我々は異形と交戦中で間に合わなかったのだ。半数以上が死傷したと聞く。今リウ族が報復か撤退かどちらを考えているか分からないが、こちらが提示する以上の対価を要求するか、最悪交渉に応じないだろう。そこでお前達に交渉を頼む」

「撤退、というか移動するようにはですか」

「ギルが言つと陛下は頷く。
「なるべく穏便に事を運びたい。まあリウ族も馬鹿ではないし、むしろ賢明だと思っている。妥当なところに落ち着けて欲しい。期限は明日の夜としたい」

「失礼ですが、陛下」

レイジが口を開く。

「期限を急ぐ理由をお聞かせ願えませんか」

陛下は今度は笑みを見せず、レイジを見つめた。

「端的に言う。前々から予兆はあったが、異形の王が代わった。まだ正式に表明されていないが、指揮系統が落ち着く前に進める場所まで進んでおきたい」

「俺達は何でも屋じゃないっつもの」

ギルの声で私は思考から現実へ戻ってくる。

「いや？ 陛下の何でも屋だろ。別にいいじゃん、何だかんだで楽しいくせに」

ギルは不満そうにうなりながら目を細める。

「まあ、あの親父達の下についてるのよりはな」

多分あの親父達とは父様と同じ世代の黒軍服の人達だろう。

「運転代わりますか？」

私はギルに尋ねた。

「あ、アリアちゃんに気遣わせてる。最悪だな」

「お前ちよつと黙れ。これ、練習しないと運転できないから気持ちだけもらつとく」

私は意外な気持ちで頷く。

「魔力があればできるのかと思っただんですけど、駄目なんですね」

「そういえばちゅーで魔力って移せるんじゃないかっただけ」

「お前ここから飛び降りる。今すぐに」

「ちゅーって口移しですか？ 口移しすると移せるんですか？」

「アリア、無理に相手しなくていいから」

シデイが冷静に割って入り、ギルは運転席から振り返ってレイジに重い視線を向ける。

「お前がいると混沌しか生み出されない」

「失礼だな。場を和ます能力と言ってくれ。あ、そういえば魔力移しといえはあれもあつたな。一夜を共にす」

ギルの拳がレイジの頭上に振り落とされて、とても痛そうな音がした。

「つたいなギル、お前本気でやっただろ」

「仮にも仕事からだ」

「とりあえず前向いて運転してください」

シデイの切りこみに二人は返事をして定位置に戻る。

「リウ族ってどんな人達なんですか？」

ギルに尋ねると、シデイも運転席の方へ身を乗り出してくる。

「私も聞きたいです」

「あれ、シデイも知らないんだっけ」

「一度しか見たことがないので」

そうかと呟きながらギルは上を向く。

「リウ族つてのは陛下が言つた通り遊牧民で、一年に一回、大体冬に皇都に数週間滞在して交易していく。渡り鳥みたいなもんかな。でもまあ実際俺も知ってるのってその位なんだよな。積極的に交流してる訳じゃないし」

「すぐにどいてくれるといいんだけどね」

レイジが他人事のように呟く。

「いや、陛下が楽しそうだったってことは、駄目なんだから」

ギルは心底うんざりしたような顔で呟いた。

確かに最近の陛下は状況が辛い時程楽しそうに笑う。異形との戦争で大敗を喫したのが六年前、それから少しずつ力の均衡を取り戻していった。この間異形の防衛線を下げたことによりとうとう領土占有率が逆転した。森を越えて異形の王都へ攻め入るまではまだ物理的に遠いが、陛下の中では計画通りに進んでいるのかもしれない。

「陽が暮れる前には着けるようにするぞ」

ギルが言って、私達は返事をする。

会議の説明の終盤、笑みを消して陛下が言った言葉を思い出した。「期限は明日、それまでに交渉に応じなかった場合、殲滅を許可する。それがお前達を選んだ理由だ」

途中、休憩のために動力炉に立ち寄り、その景色が見えてくる頃には太陽が沈んでいた。

まだ薄青さを残した空を背景に見えてきたのは、白い円錐形のテントのようなものだった。一つや二つではなく見える限り横に広く点在していて、間に立てられたたいまつが何本も炎を揺らしている。「やっと降りられるよ。やっぱり長く乗るには向いてないよね。腿痛い」

レイジが体をひねって伸びをする。

「軍用車に乗り心地を求めな。帰りは運転お前だぞ」

「さつき練習しないとできないって言ってたじゃん」

「お前は訓練でやっただろうが。しらばっくれんな」

段々と白いテントが近付いてきて、たいまつと炎と共にまばらに立っている人々の姿が見えてくる。ギルはテントの大分前で車を止めて、私達に降りるように言った。生活用品を入れた鞆を持ってで

こぼこの地面に足を下ろすと、長く座っていたせいか立ちくらみがした。

白いテントの方からやってきたのは青年で、手に持ったたいまつ
の炎に照らされて、焼けた肌と黒い髪がよく見えた。子供ではない
けれど、私より見た目は年下に見える。嫌な匂いではないが、空
気に乗って動物の脂の匂いがした。

「皇都から親書をお届けに参りました、使いの者です。族長にお取
次ぎいただけますか」

レイジが滑らかに言葉をつむぐと、青年の表情から警戒の色が少
しだけ薄れた。

「不躰な質問になってしまいましたがお許し下さい。その、どのよう
なご用件で？」

レイジは考えるように上を向く。ギルも車から降りてきて、よう
やく私の横に並ぶ。

「一応内容は親書に書いてあるので、とりあえず族長にお取次ぎい
ただけると嬉しいのですが」

レイジが笑顔で言うつと、青年は恥じ入ったように下を向いて頷い
た。

「申し訳ありません、皆気が立っているもので余計な詮索をしてし
まいました」

「いや私達も見ると怪しい団体なので無理もありません。軍服
を着てくればよかったですね。まあ、とりあえず親書の封印とこれ
を確認していただければ分かると思うのですが」

レイジは自分の黒いネクタイに刺さっている銀のタックピンを指
した。確かにタックピンとカフスポタンには鳥の羽を模した国の紋
章が刻まれている。レイジはギルに視線を移すと、ギルは手に持っ
ていた親書を裏返して蠟で押された封印を青年に見せた。青年はた
いまつを近付けてタックピンと封印を交互に見ると、一度うなだれ
て顔を上げた。

「疑ってしまって申し訳ありません。あ、いや、疑っていた訳では

ないんですけど。とにかく、族長のところへご案内します。数々のご無礼、お許し下さい」

青年は深く頭を下げた。歩き出す青年の後ろに私達はついていく。「のっけから皮肉言っただうすんだ」

前を歩くギルが隣のレイジに咎めるような声で囁く。

「皮肉だなんて気付いてないよ、あの子。頭に超がつく程素直そうだもん」

だから嫌いではないよ、とレイジは付け足す。私もどのあたりが皮肉だったのか分からなかったが、ギルは付き合いが長いから気付いたのかもしれない。

白いテントの間を縫うように進んでいくと、青年は一つのテントの前で立ち止まった。

「こちらです」

青年は私達に向き直って微笑む。

「あ、申し遅れました。シエンと申します。皆さんのお名前も伺っていますか？」

私達が順番に名乗ると、シエンは口の中で小さく復唱しながら満足そうに笑った。

「ギルさんに、レイジさんに、シディさんに、アリアさんですね。」

分かりました。少々お待ち下さい。族長、皇都から使者の方がお越しになりました」

テントに声がかけられてからややあって、テントが内側から乱暴にめくれあがった。

炎に照らされて出てきたのは、黒く長い髪を後頭部の高い位置で結った、少年のような格好をした少女だった。歓迎されていないのは明らかで、炎が移った濃い色の瞳は、私達をまっすぐ睨んでいた。「どういったご用でお越しになったのですか」

言葉遣いこそ丁寧だが、口調には押し殺したような感情がにじみ出ている。

「皇都オウヴァから、皇帝ラルゴ・エイム・オウヴァの命を受けて、

リウ族のリタ族長に親書をお届けするために参りました」

ギルが丁寧な口調で言うと、少女の表情に一瞬の驚きと激しい感情の波が広がった。怒りよりも激しい、叫び出さない方がおかしいような表情だった。

「これはまあ、大層なお客人ですな」

声のした方を振り向くと、テントをめぐり上げて、中年の男性が笑みを浮かべながらこちらを見ていた。少女の鋭い視線が男性へ向かう。男性は気にも留めていないようで、テントから出てきて少女の隣に立った。

「申し遅れました。私、ローと申しまして、こちらのリタ様のサポ
ート役を務めております」

少女の目が細められる。

「申し遅れました。族長のリタです」

やはりこの少女が族長なのだ。リタは何か考えているのか、私達を睨んだまま口を開かない。

「リタ」

シエンが心配そうな声で呟く。

「こちらへ、どうぞ」

抑揚をなくした声で言って、リタはテントの中へ入っていく。

「リタ、俺も同席しても」

「戻れ」

シエンが言い終わるより前に、テントの中から低い声が返ってくる。激情を押さえつけた表情をそのまま表しているようだった。シエンは怒られた犬のように頭をたれると、私の方を見て恥ずかしそうに笑った。

「それでは、私はこれで」

シエンが歩き出す後ろ姿を見てから、私達はローに促されてテントの中に入った。

テントの中は外と同じくらいの明るさで、背の低いチェストがい

くつかと、ランタンが数個置かれている。リタが地面に敷かれた毛織物に腰を下ろしたのにならって腰を下ろすと、ローは当然のようにリタの隣に座った。

ギルが親書をリタに渡すと、リタは封を綺麗に切って読み始めた。字面を追う表情に先程までの感情の揺れはなく、冷静だった。

「ご用件は理解しました」

リタは親書を封筒に戻して口を開く。

「ですがここから移動することはできません」

「なぜですか。対価が足りないのなら交渉には応じますが」

レイジが刺すような速さで問う。

「ここから森を越えて異形の領土へ攻め入るつもりだからです」

「いつ発たれるご予定ですか」

レイジの言葉にリタは喉をつかまれたように黙って、虚空を睨んだ。

「我々はリウ族が異形に戦いを挑むのを止めている訳ではありません。乱暴な言い方になりますが、森の前から移動していただければどんな形であれ構わないのです」

「失礼致します、リタ様」

ローが笑みを浮かべながらリタの手の中から親書を取り上げる。

リタは驚いたように親書を見送り、眉を吊り上げて何か叫びかけるが、既に字面に目を落としているローを見て唇を噛みしめた。

「即時移動に応じる場合、皇都への一年間保護、三年間の食料保障、充分すぎる条件ではないですか」

「我々はこのまま森を越えると何度も言っているだろう」

言い終わらない内にリタは噛み付くように叫ぶ。ローは慣れているのか意にも介さず続ける。

「ですが現実問題として内部の意見がまとまっていないまま出発するのは危険です。お恥ずかしい話ですが」

ローの最後の言葉は私達に向けられた。

「申し訳ありませんが、明日までにお返事をいただけますか。それ

をすぎるとこちらは武力行使も辞さない考えです。私達としても望んでいないことですので」

ギルは気が進まなさそうに言った。

「分かりました。善処しましょう」

ローは頷いたが、リタはうつむいて宙を睨んだままだった。

「遠方はるばるお疲れでしょう。ささやかながら宴の準備をさせますので、少々お待ち下さい。今案内の者を呼びますので」

ローは立ち上がってテントの出口へ歩いていった。

「おお、シエン、丁度いいところに。お客様を宿までご案内して差し上げなさい」

リタの目線が出口に少しだけ向けられる。シエンとは先程案内してくれた青年だろう。上ずった声が聞こえて、もしかしてずっとテントの側にいたのだろうかと思ってしまうた。

「それでは、よいお返事を期待しています」

レイジが立ち上がってリタに微笑みかけると、リタはレイジを睨みながらも押し殺した声で「はい」と言った。

皆立ち上がるのに合わせてテントの外に出ると、あたりはすっかり暗くなっていて、たいまつを持ったシエンが飼い主を見つけた犬のように人懐こい笑みを浮かべていた。

「こちらになります」

リタは最後までこらえるようにこちらを睨みつけたままだった。

テントの外で見送るリタとローに挨拶をして、私達はシエンについて歩き出した。

「相当面倒くさいところに来ちゃったなあ」

前を歩くレイジが声をひそめて呟く。

「族長が女の子だったからお前なら逆に喜ぶと思ったんだけど」

レイジの隣でギルが囁くと、レイジは眉をひそめて苦い顔をする。

「ああいうタイプは苦手、っていうかこれ以上は暴言になるから言わないけど」

ふと一番前を歩いていたシエンが振り返って、申し訳なさそうに

眉を下げて微笑んだ。

「すみません、リタが、あ、族長がご迷惑をおかけしたみたいで。やっぱり、苦手、ですよね」

ギルとレイジは驚いたような顔をして、居心地が悪そうに顔を見合わせる。レイジは早々に観念したようで息を吐き出した。

「まあいいや、隠すことでもないし。君、相当耳がいいんだね。全部聞こえてた？」

レイジが言うと、シエンは困ったように笑った。

「はい。皮肉だったのは気付きませんでしたけど。すみません、俺鈍くて」

ここに来た時の会話もしっかり聞き取られていたようだ。

「いや、こっちこそ申し訳ない。君のことは嫌いじゃないから、こんな汚い大人になっちゃ駄目だよってことで受け取っておいて」

「まあその人が見えるところで暴言吐いたら駄目ですよ」

シデイが言うと、ギルは痛いところをつかれたような顔をしてシエンに謝った。強い言葉を使っていたのはレイジだが、会話に加わっていたということに気にしているのかもしれない。

「いえ、それよりリタの方が。失礼なことを言ってませんでしたか」
シエンは気にしていないようで、眉を下げたまま尋ねる。

「別に失礼ではなかったけど」

レイジは考えるように上を向く。

「現状は君に聞くのが一番早いのかな。ちょっと夕食が始まるまで質問に付き合って欲しいんだけど」

シエンは一瞬悩むようなそぶりを見せたが、頷いた。

「本当は手伝いをしに行かなきゃいけないんですけど、お客さんの相手をしてたつてことにするので大丈夫です」

「怒られないんですか？」

私が尋ねると、シエンは笑って首を振る。

「お客さんの相手をするのは本当じゃないですか。あ、あそこです。ちよっと待っててください。ランプをつけてきますんで」

いくつも立ち並んでいるテントはどれも同じに見えるのだが、シエンには分かるのだろう。こちらを振り返って、たいまつを持ったまま小走りにテントの中へ入っていった。

明かりがテントの側で燃えるたいまつだけになって、炎に慣れた目には急に暗く感じられた。

「いい子だね。清々しいくらい」

レイジが微笑みながら呟く。

「皮肉か？」

「んーん。本心」

シエンがテントの中から出てきて、子犬のような笑顔を見せた。

「どうぞ。ちょっと狭いですけど」

中はリタのテントとほとんど変わらず、ランタンとチェストと毛織物の絨毯がしかれているだけだった。多分床で生活する様式なのだろう。

「本当は女性のテントは隣なんですけど、今は話し合いだからいいですよ」

「あ、何だ。同じ部屋じゃないんだ。残念」

「お前この期におよんでまだ言うか」

ギルが言うとレイジは楽しそうに笑った。

「でもこんな鍵のかかってないところだったら夜這いし放題だね」

言い終わらない内にギルがレイジの頭を音がするくらいはたくと、レイジは叩かれた箇所をなでつけた。

「うっ、今日はギルが容赦ない」

「自業自得だ」

シディはいつも通りの冷ややかな目で、シエンは困った顔で微笑んでいて、全員が円くなるように腰を下ろした。

「では、何なりと聞いてください」

「じゃあ遠慮なく。異形に襲われた時のこと、詳しく教えてもらえるかな」

レイジの表情が一変して真剣になり、シエンは唇を引きしめてう

つむいた。

「異形に襲われたのは一週間くらい前で、ここよりもっと西のところでした。でもやっぱり森には近くて、もしかしたら異形の領土内に入ってしまっていたのかもしれない。最初は爆発が聞こえて、あたり一面が燃やされていて、それで、剣を持った異形が、いて」

シエンは言葉を切って眉を寄せた。

「すみません、必死であんまり覚えてないんですけど、まだ異形の数が少なかったのが救いでした。多分、五人くらいで。でも、たった五人に、俺達は半数以上が殺されました。それから異形を二人殺して、三人は逃げられてしまったんですけど、全部終わった頃に皇都の兵士の方々がやってきました」

シエンは思い出したように顔の前で手を振る。

「あの、でもあなた方を恨んでるとか、そういうことではなくて。

皆さん埋葬を手伝ってくれましたし。分かっている人は分かっています。でも、一部の人は」

「あの族長の子とか？」

レイジが言うとシエンは迷うように目を泳がせる。

「リタの家族は殺されました。父親が族長で、それで親族もみんないなくなってしまうので、リタが族長を務めることになったんです」

「あの人は？ サポート役の」

ギルが言う。

「ローさんはリタの親族ではなくて、有力者で族長の座を狙っている。あ、族長は世襲制なんですけど」

レイジは目を細めて口を開く。

「あの子放っておいて平気なの？ 真面目な話、脅されて襲われるかもよ？ あのおじさんに。世襲制なら既成事実を作って結婚すればいい訳だし」

まあ襲つか襲わないかはあのおじさんの好みだけど、と付け加えて言うと、シエンの顔色がみるみる内に変わる。

「それは、考えなかった訳じゃありませんでした。でもリタは戦闘訓練を受けてるし、俺と俺の仲間が注意してあの人を監視しようってことになってます」

「まあ深くはつつこまないけど。それで、今リウ族は報復と撤退、どっちに動こうとしてるの？」

「リタは、報復です。ローさんは撤退。リウ族の中でも意見が割れていて、でも撤退の方が多いです」

「まあ賢明だろうね」

レイジは言って息を吐き出した。

「事情は大体分かったよ、ありがとう。君の仲間があのおじさん側に寝返らないように気を付けなよ」

シエンはあまりよくない顔色で返事をする。

「ちなみに君は報復と撤退どっちがいいと思ってるの」

「撤退です」

シエンはまったく迷わなかった。

「異形五人にあの様じゃ、勝ち目なんか無い。でもリタも馬鹿じゃないんです、ちゃんと分かってます。でも報復しないと怒りを向ける場所がない。亡くなった人達に申し訳が立たないと思ってるんです」

レイジはあまり興味がなさそうに相槌を打つ。

「面倒くさい相手を好きだねえ、君も」

途端に、血の気がなかったシエンの顔が赤くなった。

「ええと、いや、まあ、そうですね。はい」

「素直なのはいいことだよ、少年」

「あの、でもリタには言わないで下さいね。リタにとってはただの友達だと思うので」

「まあ話す機会もないと思うけどね」

「シエン」

怒鳴るのを抑えたような声が明後日の方から聞こえて、私は体を跳び上がらせていた。シエンが驚いた顔をしてテントの入口まで転

がるように移動すると、テントの入口をめくった先にはたいまつを持ったリタが立っていた。

いつからいたのだろうか。聞かれてはまずい話ではなかったはずだが、今更取り返すこともできない。リタは先程と変わらない、憤りを抑えこんだような目でシエンを見ていた。

「宴の準備ができたからお客様をお連れして」

シエンの返事を待たず、リタは走って引き返していく。シエンは遠ざかっていくたいまつ炎を見たまま何か言いたそうに口を動かしていたが、やがて肩までうなだれた。

「聞こえて、たんでしょうか。いや、聞こえて、ましたよね。これって、振られたってことでしょうか」

「あ、そっちの心配なんだ。まあ他は聞かれて困る話じゃないか」
レイジがつっこむと、ギルは曖昧な声でうなった。フォローしようとしていたのかもしれない。

「恥ずかしかった、とか」

「そりゃこんな大勢の前で言われたら嫌でしょうよ」

「嫌です、よね。やっぱり」

シエンは泣きそうな顔でますます肩を落とす。

「いや何で落ちこんでんの。さっきのは告白じゃないでしょ。ちゃんとはつきり言うんだよ、今日じゃなくてもいいから。君のいいところはその直球さなんだからね」

レイジは立ち上がってシエンの肩を叩いた。

「まあ何はともあれご飯ご飯。お腹いっぱいになれば無条件で幸せになれるし」

「幸せになれるのは同意する」

ギルとシデイが立ち上がって、私も立ち上がった。

「難しいん、だね？」

シデイと目が合って、私は眉を寄せていた。

「まあ、難しいね。恋愛が絡んでれば尚更ね」

私はシデイの言葉を上手く飲みこめなかった。恋愛は頭では知っ

ているけれど、経験したことはない。小さい頃父様を好きだと言ったら、それは違うと言われたのを覚えている。

私は一番最後に外に出た。黒い空にはもう隙間もない程、星が散っていた。

中央の大きなたき火を円く囲って、百名程が地面に敷いた毛織物の上に座っていた。多分、全てのリウ族が集まったのだろう。私達の席はリタとローの隣で、ロー、リタ、レイジ、ギル、シデイ、私の順だった。

焼き物の杯に入った飲み物が配られた後、リタの形式的な挨拶があつて、戦勝パーティの時と同じように乾杯が行われた。私は少し身乗り出してリタとロー、みんなと杯をぶつけて透明な液体を見た。ここで潰れられても困るのであまり飲まないようにと言われていたが、右手の包帯も取れているので少しだけ飲んでみたいと言ったのだ。

みんなが杯を傾けているのを横目で見て、一気に飲みこまないように口の中に入れた。冷たいのに舌をえぐられるようで、飲みこむと喉も同じように熱くなった。自然と顔をしかめて固まっていたら、シデイの呆れた声が飛んできた。

「無理ならやめといた方がいいと思うけど」

「おや、お酒は苦手でしたか」

ローが身乗り出してきて、私は慌てて顔の前で手を振った。

「飲んだの初めてなんです。だから飲んでみたいって自分から言っただんです。ごめんなさい」

「飲めなかった？」

ギルが私の方を見て、私は言葉につまる。

「えっと、思ってたよりその、辛かったというか、熱かったというか」

みんな美味しそうにお酒を飲むので、お酒はもっと甘いものだと思っていたのだ。レイジが笑いながら杯を振ってこちらを見た。

「初めて飲むにはちょっと強すぎるかもね。帰ったら甘いお酒から飲んでみるといいよ」

「お酒じゃないものを用意させましょう」

ローが近くで給仕をしていた女性を呼んで一言伝えた。

「ごめんなさい、用意していただいたのに」

「構いませんよ。リタ様もお酒ではありませんしね。私達の中ではお酒は十六歳からなので」

ローは嫌味ではなく言って、リタに視線をやる。

「失礼ですが、おいくつですか？」

レイジが尋ねると、リタは落ち着いた表情で少しだけレイジに顔を向けた。

「十四です。もうすぐ十五になります」

レイジは形式的な相槌を打つ。

「そのお若さで責任のある立場とは、さぞかし大変でしょうね」

ギルが若干渋い顔でレイジを見たのを見て、胸がざわついた。やっぱりレイジはリタと仲良くする気がないのだろうか。リタは特に感情を見せることもなく、そうですねと端的に相槌を打った。

あまり心によくないやり取りを聞いている間に、飲み物と料理が運ばれてきた。飲み物は先程ローがお酒の代わりとして頼んだもののように、見た目は白くて牛乳のようだったが、飲んでみると甘酸っぱかった。

人数分それぞれの前に置かれた大皿には一枚肉と見たことのない白い塊が乗っていて、これも食べると美味しかった。飲み物はヨーグルトジュースで、白い塊はチーズと言うらしい。

食事を終えてまわりが各々小さい塊になって騒がしくなり始めた頃、シエンがこちらにやってきた。話の場が決していい雰囲気とは言えなかったので、心の中で少しだけ安堵する。

「いいですか」

リタは答えなかったが、ローが承諾したのでシエンは私達と向かい合うように座った。

「お酒ですか？」

私がシエンの持つている杯を見ると、シエンは嬉しそうに笑った。
「お酒です」

「ということは君は十六歳以上ってことか」

「この間なつたばかりです」

「若いなあ」

レイジがしみじみした様子で呟く。

「お前もそんなに歳取ってないだろ」

「甘いなギル。二十歳を超えてるか超えてないかは大きな差だ。二十歳すぎると自分の歳が覚えられなくなるんだぞ」

「お前まだ二十三だろ」

「だからギルも来年から同じ状態になるんだよ」

「それなら私はもう隠居ですな」

ローが言つて、レイジは笑った。

「失礼しました。ローさんには頑張っていたただかないと」

「十六になったから、結婚もできるんですよ」

自然と話の輪が二つに分かれていて、シエンは私とシディにしか聞こえないくらいの声で言った。

「男の人は十六なの？」

シディが尋ねるとシエンは頷く。

「女の人は十四です」

「そこは皇都と一緒になんだ」

シディは納得したように声をもらす。結婚なんて遠すぎてまったく想像ができないし、第一私はまだ恋愛もしたことがないのであった。横目で隣を伺うと、男性達に挟まれてリタはずっと宙を見ていた。せめてこっちの方が話しやるいのではないかと思ったが、上手く呼ぶ手立てが思いつかない。

「あ。シエンさん」

「何ですかアリアさん」

名前を覚えられていたことに驚いたが、今はそこに構っている時

ではない。

「リタさんが話し辛そうなので、向こうに行ってあげてくれませんか」

リタに聞こえないよう小さな声で言うと、途端にシエンは言葉につまったように目を泳がせる。

「いや、あの、やっぱりさっきの今で行き辛いというか」

「そんなこと言ってたらずっと喋れなくなっちゃうじゃないですか」

「アリアに諭されるなんて末期ね。あたしも行ってあげた方がいいと思うけど」

シエンはシディを見て、私を見て、苦しそうな表情でうなづいて顔を上げた。

「分かりました」

リタの方に目をやるとこちらを見ていたようで、目が合うと慌てたようにそらされてしまった。

シエンが杯を持って立ち上がると足音が駆けてくるのが聞こえて、振り向くと少年が私達の側に立ち止まっていた。

「帰れ」

声変わりもしていない少年の声はそれでも低く、黒い目は炎を反射して、細かった。初めて会った時のリタと同じ、怒りよりも強い感情が少年の顔にはつきりと表れている。

「間に合わなかったくせに今更来るな」

叩きつけるような声に、誰が口を開くよりも早くリタが立ち上がった。少年の側へ歩んで、目の前でしゃがみこむ。少年は一瞬ひるんだように身構えたが、すぐにリタにも同じ顔を向けた。

「八つ当たりしても亡くなった人は帰ってこない」

リタの声は優しくもなく、抑揚がなかった。少年は驚いたように目を見開き、眉をつり上げる。

「リタはそいつらの味方するのか」

「別に味方してる訳じゃない。皇都の人間は約束を破った訳じゃないだろう」

「でも間に合わなかったら何のための約束だよ」

「それは最初からそういうこともあると決めた上での約束だ」

少年は言葉を飲みこんだように唇を噛んで、服の裾を握りしめて一つ大きな地団駄を踏んだ。

「何でだよ、何でリタはそんなに平気な顔してられるんだよ。族長が殺されたんだぞ」

少年の言葉は、リタが放った少年の名前だろう単語に押さえつけられた。リタの表情を見て少年の顔に若干の怯えが浮かぶ。

「さつきも言ったけど、文句を言っても亡くなった人は帰ってこない。言いたい気持ちは分かるけど、こうやって歓迎してる場ではないで」

少年は完全に黙りこんだ。泣きそうな目でリタから目を離すこともできずにいると、シエンが少年の肩に手を置いて、一言謝って場を離れていった。

リタが立ち上がると、ローが硬直から解けたように口を開く。

「申し訳ありません、大変なご無礼を。あの子は母親を亡くしてしまして」

「いいえ、本当のことですから」

レイジが微笑して言う。

「そろそろ失礼させていただきますね。酔いが覚めない内に」

ギルはレイジの言葉に重なるように言って、立ち上がった。

「ああ、それでは案内の者を」

「私が行くから結構です」

リタは私達の方を見ずに体の向きを変えて、宴の炎から遠ざかっていった。

皆それぞれにローに挨拶をして、白いテントの群れに向かって進むリタの後ろ姿を追いかけた。

あんたはあたしを助けられない(2)

隣のテントから聞こえていたわずかな話し声も、いつの間にか聞こえなくなっていた。私は寝返りを打って、まだ熱を持っていない布の上に移動する。シデイは反対側を向いているので顔は見えないが、息が深いから多分寝ているのだと思う。

目をこらして枕元の懐中時計を見たら二時前だった。毛布にくるまってからもう二時間たっている。慣れない場所で眠るとというのが初めてなので、今後は慣れていかなければいけないと思うが、眠れない原因は多分それではなかった。

私は起き上がって、シャツパジャマの上からシヨルダーホルスタールをつけてガウンを羽織って靴を履いた。かなり妙な格好だがまだ真つ暗だし、これから眠くなるかもしれないので着替える気はなかった。

シデイを起こさないようになるべく静かにテントを出ると、空気は冷たくてテントの側で燃えているたいまつが暖かく感じる。見上げると皇都より星が多く、月の位置がとても高くなっていた。

私はテントから少し歩いて、草の生えている地面に腰を下ろして膝を抱えた。月が明るいけれど、炎から少し離れたから目を閉じてしまえば完全に暗闇になる。ここで寝たら風邪を引くだろうかと思ったら、草を踏む音が聞こえてきて、振り返った。

「寝れないの？」

暗闇に浮かぶワイシャツの白と背格好で誰だか分かった。

「ごめんなさい、起こしましたか？」

ギルは軽くうなづいて私の隣まで歩いてくる。

「確かに起きた、けど、元々あんまり寝ないからアリアのせいじゃないよ」

「でもまだ二時ですよ」

「いやー心配して来たんだぞ」

「それは、ありがとうございます」

ぶつきらばうな物言いになってしまったらどろつかと思ったが、言い直すのも変なので黙っておく。静かになってギルが動く気配がないので、どうすればいいのか少し困った。

「寝ないんですか？」

「今はいいかな。目、覚めちゃったし」

ギルはしゃがみこんで私と同じくらいの目線になった。

「あの、さ、もし嫌じゃなかったらちよつと話さない？」

まだ眠気もないし、断る理由もないので私は頷いて返事をした。

ギルは嬉しそうに笑って草の上に腰を下ろす。

「スーツで寝てたらしわになりませんか」

近くで見たギルの格好はワイシャツにシヨルダーホルスター、スラックスだった。言ってるから、自分はパジャマにホルスターにガウンに革靴という妙な格好だったと思っただが、暗くてあまり見えないのがまだ救いだらう。

「予備はあるけどパジャマは持ってきてないからなあ」

ギルはあまり気にしている様子もなく答えて、思い出したように私の方を見てためらうように口を開く。

「やっぱりパーティの時の続き聞いてもいい？」

私は首をひねる。

「パーティの時の続きって何ですか？」

「言いかけて止めたやつ」

私は少し考えてから思い出して相槌を打った。確かギルが言いかけて気になったけれど、シディとレイジのところに着いてしまったから聞き返す機会を逃してしまったのだ。

「答えられることだったら、どうぞ」

「ん、じゃあ単刀直入に。アリアはトリニア大将と血が繋がってるの？」

ああ、そういうことか。暗いからはっきりと表情までは読み取れないかもしれないが、シディに言ってしまったからもう隠してお

くこともないだろう。

「あの、一応内緒なんですけど、血は繋がってないです」

ギルはばつが悪そうに髪を撫でた。

「ええと、養女ってこと？」

私は頷く。

「いつから？」

「四年前です」

ギルがこちらを見て草の上の手について、少しだけ身を乗り出してきたので、私は自然と体を引いていた。

「四年前ってさ、何かあった？」

「どうしてですか？」

「いや、記憶が曖昧なところがあつて。あの頃はもうブリユータ・ドウタにいたから皇舎の近くにいたんならもしかしてアリアとも会つてるかもしれないし」

「ギルと会つたことは、ないです。私が覚えてないだけかもしれないかもしれませんけど」

ギルは低くうなつて私の顔を見つめていた。

「そっか。俺も会つてたら多分覚えてると思うんだよ。まあ丁度そこの記憶が飛んでるのかもしれないけど」

声が消えると静かになつて、ギルがまた口を開いた。

「何で養女になつたの？」

「シデイにも同じこと聞かれました」

「ん、何だシデイはもう知ってるのか」

私は返事をして頷く。

「養女になつた理由は私もよく分からないんです。ただ陛下にそうしなさいと言われたので。父様には、あ、トリニア大将には小さい頃からお世話になつていたので違和感はなかったんですけど」

「両親はいないの？」

「母親は小さい頃に亡くなってます。覚えてないんですけど、私を産んですぐだったそうなので」

私は一度口を閉じた。多分、この場で吐き出しておいの方がすつきりするだろう。

「あの、なので、さっきの男の子に言われたことが気になって、それで余計に寝れないんだと思います」

ギルは考えるように上を向いて、思い出したように声を上げる。

「宴会の時に言われたやつ？」

私は頷く。

「気にするのは分かるんだけど、今の話との関係が分からない」

私はシャツの胸元を握りしめる。

「母様は私が殺したんだって、言われることがあつたんです。父様は違つて言ってたんですけど、私は、普通じゃ、ないので。だからあの子のお母さんが殺されたって聞いた時、お前が殺したんだっていうのが少し、同調してしまいました」

「ここに兵が間に合わなかったのはアリアのせいじゃない」

強い口調で言われて、私はギルの顔を見ずに頷いた。

「分かってます。大丈夫です」

けれど心に引っかかる。忘れてしまおうとしても、忘れてはいけないと言われているように蘇ってくる。

「ちよつと待ってて」

ギルは立ち上がってテントの方へ駆けていった。手持ちぶさたに黒い芝生を眺めていたら足音が戻ってきて、ギルは私の頭上で何か差し出した。

「はい」

頭の上で受け取って見てみると、紙に包まれた小さな立方体が手の中に乗っていた。

「何ですか？」

「キャラメル」

ギルは先より少し近い位置に腰を下ろして、口の中に何か放りこんだ。

「キャラメルって何ですか？」

「え、嘘、キャラメル知らないの？」

あまりにも驚かれたので、私は恥ずかしくなるのと同時に少し腹が立った。

「皇舎にないものは知りません」

「いや、非常食で習わなかった？」

キャラメルとはどうやら食べ物らしい。

「習ってません」

「あれ。キャラメルって一般的な非常食じゃないのか？」

ギルは呟きながら首をひねる。

「まあ何でもいいや、とりあえず食べて。甘いもの食べると幸せになれるから」

「甘いんですか？」

「食べれば分かるよ」

私は紙の包みを開いて、出てきた小さな塊を口に入れた。焼けるような甘さが舌の上に広がって、噛んだら意外と硬くて歯にくっついた。

「どう？」

ギルが私の顔をのぞきこんでくる。

「甘いです。すごく」

「そりゃそうだ」

ギルは嬉しそうに笑った。

「お腹空いてる時ってさ、どうしても悪い方へ考えがちで、だから美味しいものを食べてお腹いっぱいになると気にしてたことも少し軽くなるんだって」

今特にお腹が空いている訳ではないのだが、確かに美味しいものや甘いものを食べると気持ちが高揚するというのは何となく分かる。

「まあ受け売りなんだけど」

「少し、分かりました。これ噛むんですか？」

私は自分の口を指差す。

「噛んでもいいけど歯にくっつくから、俺は舐めてる方が好きだな。気に入ったんならもう一個あげる」

ギルはスラックスのポケットから同じような塊を取り出して、私に差し出した。今すぐ食べるといふ訳ではないので私は手の平で包んでお礼を言う。

会話がなくなってしまうと、私は頭の中から言葉を探して思い出した。

「あの、そういえば夜這いって何ですか」

ギルは怪訝な顔で表情を止めて、しばらく苦悩したようになり声をあげて髪を撫でた。

「あのさ、アリアって箱入り娘なの？」

「シディにも同じこと言われました」

「あー、じゃあそうなんだろうな。どこでそんな言葉をつて、レイジか」

あいつ後で鼻つまんどく、とギルが小さな声で付け足す。

「聞いたらまずかったですか」

「そうだなあ」

ギルは頭を抱えたまま低い声でうなる。

「男の人が夜女の人に会いに行くこと、かな？」

「あんまり変な意味には聞こえないんですけど」

「いや、うん。そう思っというて」

また言葉がなくなってしまうと話題を探っていると、ギルが口を開く。

「少し落ち着いた？」

私は少し迷って、頷いた。

「ギルの両親はどうしてるんですか」

「皇都で普通に暮らしてるよ。俺生い立ちは普通だし。魔力の兆候があったからブリューテ・ドウタに入ったけど」

ギルが思い出したように私の顔を見つめる。

「何ですか？」

「いや、嫌だったら言わなくてもいいんだけど、アリア、本当の父親は？」

私は一瞬言葉につまる。

「います、けど」

ギルは言葉をつなげなかったので、更に私の言葉を待っているのが分かった。

「特別話するようなことは、ないです」

少し間をおいてギルが言う。

「そっか」

私は嘘をつくのが下手なので、ギルも何かしら感付いているのだろう。けれど今話すべきことは何も、ない。

今度こそ本当に何も言葉が出なくなってしまうって、一面に広がる星空を眺めていたら隣で芝を踏む音が聞こえた。

「そろそろ戻るか」

立ち上がってスラックスについた芝をはたいているギルに合わせて、私も立ち上がる。

「今更だけど寒くなかった？」

私は首を振って、自分が変な格好をしていたことを思い出した。

「変な格好ですみません」

「いや、暗くてよく見えない」

「ならいいんですけど」

言った途端、ギルが首を傾けて私をのぞきこんでくる。

「何で言ったそばから見るんですか」

私は思わず声を強くしてガウンを胸の前で握りしめる。

「言われたら気になるのが人ってもんだろ。気になるなら言わないのが一番だぞ」

ギルはおかしそうに笑ってテントの方へ歩き出した。

「そういえばギルは何でネクタイしてないんですか？」

「んん、反抗期の名残、かな？ これは俺の趣味」

ギルは首元の黒いチョーカーを指す。

「入った当時が、ええと、十四か。丁度反抗してみたい年頃だろ。さすがに軍服のネクタイ外して行ったら殴られた」

思い出したのか、ギルの頬に笑みが浮かぶ。

「殴った人今度紹介するよ。俺とレイジの教育係だったんだけど。二人共面倒な子供だったから今考えるとすごいなあと思うよ。俺だったら絶対やりたくないもん」

想像ができないが、そんなに酷かったのだろうか。話している内にもうテントの前まで着いて、足を止める。

「まあ軍服は軍服で赤いから嫌いなんだけどさ。全身真っ赤になるから」

頭の中に思い浮かべてみると、確かにギルは髪が赤いから全身赤になるのだった。

「でも別に変じゃなかったですよ」

「む。じゃあ言わない方がよかつたな」

言われたらさっきのARIAみたいに気になるとギルが付け加えて、私は笑った。

「じゃあゆっくり寝ろよ」

頭を撫でられて、反射で体がすくんだ。手を振ってテントの中へ入っていくギルに、私は少し名残惜しい気持ちで手を振り返した。

何度か夢と現実を行き来して毛布の中で目が覚めると、シデイが隣で既に着替えを終えていた。枕元の懐中時計を引き寄せて開くと八時五分くらいで、昨日朝食は九時だと言われていたので体を起こした。やっぱり夜更かしをしていたからもう一度毛布に倒れこみたくらい、体が重い。

「後三十分くらい寝ててもいいけど」

私は首を振る。

「せつかく起きたから、起きる」

「水は貴重品みたいだから顔洗うならこれにオスタ（水呪文）で水ためて使って」

シディは顔が丸ごと入りそうな大きな鍋を私の前へ引きずり出した。

「これどうしたの？」

「水ためるものが欲しいって言って貸してもらった」

「オスタ（水呪文）って水ためるとかできるの？」

「魔力を絞って指先から出すように、ってあんたそういう訓練はやったことないの？」

私は頷いた。

「まあ前線とサバイバルは違うけど、これは必須よ、必須」

私は急に危機感にさいなまれて鍋の上に手をかざす。

「練習するなら外でやって。後、鍋も壊しそうだから地面で」

すかさず飛んだ物言いに、あまりにも信用されていないことに私は少しむくれた顔をしてみせたが、確かに成功する自信もない。

パジャマのまま靴を履いて外に出たら、晴れているが空気は冷たかった。地面に手を向けると、またシディの声が飛んでくる。

「もうちょっと離れて」

「さっきから心配しすぎ」

「成功しなくて全力で撃たれたらテント吹っ飛ぶでしょ」

もうこれは意地でも成功させなければいけない。言われた通り距離をとって、地面に左手を向けて意識を指先に移す。手に伝う魔力を絞って、詠唱を破棄する。詠唱がない方が呪文の威力は弱まるからだ。

『オスタ』

指先全てから滴がしたたり落ちて、砂に覆われた地面に吸いこまれていく。これでは絞りすぎかと思って魔力を少しずつ戻していくと、蛇口をひねるように指先から水が流れ出す。

できたとシディを振り返ろうとしたら、隣のテントから出てきたギルと、目が合った。

「おはよ。何してんの？」

「あれ、アリアちゃん何してるの？」

水を出す練習をと言おうとした時には既に遅く、意識をそらしてしまつた左手は抑えていた水を全て放つてしまつて、地面をえぐる大きな音と共に私は背中から地面に滑つていた。

魔力が強すぎるのも考えものだとシデイに言われ、結局水は出してもらつて、汚れてしまつたパジャマも洗つて干した。何事かと駆けつけてきた人達に事情を説明して、今はテントに運んでもらつた朝食を四人で囲んでいる。

「とうか何でサバイバル訓練受けてないの」

「サバイバルさせるとは思つてなかつたんじゃないの」

シデイが言うのに、ギルがライ麦パンをかじりながら答える。

「でもあれはギルが来なかつたらできてました」

「ギル、いけないなあ。練習の邪魔しちゃ」

「あれくらいで暴発するのはできてるって言わないの」

もつともな言葉に私は残りの言い訳を飲みこんだ。体はある程度の魔力で覆っているから怪我はないが、確かに毎回あれでは安心して水が出せない。

「あ、凹ませた」

レイジの言葉でギルの表情がわずかに狼狽するのに、私は慌てて首を振る。

「凹んでません、大丈夫です」

「ギルは素直だなあ」

笑い声をたてるレイジをギルは横目で睨みつける。

「それで、そんな素直なギルは昨夜アリアちゃんと外で何してたのかな」

ギルが弾かれたようにレイジを見て目を丸くする。

「お前、どこから起きてた、っていうか言つなよこの場で」

ギルが叫ぶ。

「私も気付いてました」

シデイが言うのに私もギルと同じように振り向いた。

「ごめん、うるさかつ、た？」

「心配するのそのなのアリア。別にうるさくはなかったけど、外で話してるの聞こえたから」

「俺には夜這いするなみたいに言っておいて、自分はしてるのかないよなあ」

「つてか夜這いじゃねえ」

昨日聞いた定義だと夜這いになるのではないかと思ったが、話がややこしくなりそうなので言わないでおく。帰ったら自分で調べてみよう。

ギルは先程洗ったばかりでまっすぐに became 髪をかき回して、覚悟を決めたようにレイジを睨む。頬が赤いのは多分気のせいではないだろう。

「とうかやましいことはない。何も」

「動揺しないギルなんてつまんないよ」

「お前、人を何だと思ってるんだ」

確かに話をしたただけだから変なこと何もないのに、改めて言われると少し居心地が悪いのはなぜだろう。

「まあギルをからかうのはこのくらいにしておいて、食べ終わったら今日の予定を話そうか」

「お前が振ったんだろうが」

ギルは叫んだが、それ以上何も言わなかったのでお互い言いたいことは言い終わったようだ。

昨夜も出されたヨーグルトジュースを飲み終わったあたりで、レイジが話し始めた。

「で、期限は今日の夜な訳だけど、昨日言われた通り昼の一時から会議がある」

昨夜、宴の席でローに出席を頼まれたのである。リタは反論したが、聞かれたらまずい話でもするのかという意見をくつがえせず要件を飲むこととなった。ローとしては援護射撃を期待してだろうが、黙っていても多数決で有利になる。ただ、撤退派が多数だとい

うから、追いつちをかけるための保険だろう。

「あんまり口を挟んでもこっちの問題だって逆なでしそつだから基本黙ってたい。元々撤退派の方が多いいみだからね。意見を求められたら俺かギルに投げてくださいいよ。まあ、言ってもいいんだけど」

レイジが視線を私に向ける。

「あの子に同情してる？」

あの子とはリタのことだろう。

「特別そういうことはないです。私も犠牲を出すよりは撤退した方がいいと思ってるので」

「それならいいんだけど。こっちで意見が割れてるのはあんまりよくないから」

基本的には静観で、とレイジが結ぶ。

「あの、もし報復派が多数になったら、武力行使に出るんですか」

「十中八九ないと思うけど、確かに完全には言い切れないね。そうしたら陛下に電信機で報告して、再交渉してそれでも駄目なら戦闘かな。令状は持つてるから。でも力の差は圧倒的だし、陛下に盾ついてまで報復にすぎる理由はないと思うんだけど」

レイジは息を吐き出す。

「そこまで分かっているはずなのに、何であの子は報復にこだわるのかなあ」

「理屈で動けるならもうとっくに撤退してるだろ」

ギルの言葉にレイジは苦い顔をして笑った。

「理屈じゃないってこと、ね」

納得したような間を挟んで、レイジが口を開く。

「以上。質問は？」

「午前中は待機ですか」

シデイの言葉にレイジは頷く。

「一時前に戻ってくれば何してもいいよ」

暇だなとギルが呟くと、俺は昼寝するよとレイジが応じる。

「ギルも寝とけば？ 昨夜あんまり寝てないんでしょ？」

レイジが意地悪く笑ったのに、ギルは舌打ちした。

「ため、だから蒸し返すなっつの」

「はいはい、じゃあ解散」

レイジが笑うのをギルは忌々しそうな目で眺め、金色の目と目が合って、私は視線をずらしていた。

銃を分解していつもより丁寧に拭いたり、グリスを塗ったりしたが、やはり懐中時計を見ると十時四十分で、三十分しかたっていない。眠くもないし、シデイは本を読んでいるので、一声かけてテントの外に出た。

起きた時には透明だった空は、雲に覆われてまったく見えなくなっていた。吸いこんだ空気は暖かかったのでジャケットを置いてこようかと思ったが、そうすると銃が見えるのでやめた。火器は珍しいので住人を変に刺激しない方がいいだろう。

今銃を持っているのは世界中で人間側、つまりオウヴァの軍だけで、三年前に実用化された。異形は火器の開発が遅れているらしいが、時間の問題だろうと陛下が言っていた。六年前の大敗から異形とほぼ互角にまで持ち直したのは火器のおかげといってもいいと、父様が言っていた。

よくよく考えたら、テントから出たらまわりは同じテントしかないので離れたら一人では戻ってこれない。でも迷ったら誰かに聞けばいいかと思つて歩き出したら、知っている顔が歩いているのを見つけた。

「リタさん」

横顔が確認できてから呼ぶと、リタは弾かれたように私の方へ振り向いて、私を見とめて幾分落ち着いた顔に戻る。

「どこか行くんですか？」

リタは一瞬迷うような顔をした。

「シエンと稽古をします」

「稽古って何の稽古ですか？」

「剣の」

気付いてよく見ると、リタの腰には長い剣とナイフが下がっていた。

「それ、一緒に行ったら駄目ですか？」

言ってから、シエンはリタが好きだったと思い出して、言うべきではなかったかと思った。けれど剣の稽古など見たことがないし、シエンには悪いが見たい気持ちのほうが勝っている。

「そんなに面白いものでもないですけど」

「いえ、きつと見たことがないんで、面白いと思うんです」

ものすごく嫌がられている訳ではなさそうなので、押してみた。

リタは困ったように眉を寄せたが、「分かりました」と頷く。私はお礼を言っ、歩き出したリタについていく。

目的の場所は意外と近く、テントがなく開けた場所でシエンが立っているのが見えた。

「あれ、アリアさんも一緒？」

シエンが駆け寄ってきて、リタと私を代わる代わる見る。

「すみません。剣の稽古見たかったので」

二人きりになる機会を潰してしまっって申し訳ないという意味もこめたのだが、シエンは邪気のない顔で笑った。

「いいえ。でも思ってるのと違うかもしれませぬよ。リタ、強いから」

リタを見ると、先程とは違う沈鬱な顔をしていて、私が見ていることに気付くと顔をそらして表情を消した。

「具合悪い？」

シエンが心配そうな顔でリタをのぞきこむと、リタは火のついたような目をしてシエンを怒鳴りつけた。

「うるさい」

シエンは不服そうな顔をする。

「うるさくない。具合悪いなら休んだ方がいいよ。最近ばたばたし

てたし。この後会議も」

シエンの言葉の途中でリタは剣を抜いた。シエンはあまり納得のいかなさそうな顔をしてから、私に「離れていて下さい」と言った。シエンが長い剣を抜くと、すぐにリタの方から踏みこんでいった。刃が弾き合う度、金属と金属がこすれてぶつかる綺麗な音が響く。リタの目はずっとシエンを睨んだままで、シエンはどこか複雑な表情でリタを見つめていた。

刃が合わさったまま拮抗していた体勢で、シエンが力を抜いたのだろう、リタがバランスを崩して前によるめいた。

シエンの刀身の平がリタの手首に触れて、止まった。

シエンが剣を引くと、リタは体勢を直して唇を引きしめてうつむく。

「やっぱり休んだ方がいいよ。いつものリタらしくない」

リタは目を見開いてシエンを睨みつける。

「いつものあたしって、何」

シエンは少し困ったような表情をして、口を開かない。

「答えられないことなら言わないで」

言葉が終わる前に、シエンはリタの腕をつかむ。驚いた顔をしたリタに、言った。

「辛い時、辛いって言った」

リタの表情から険しさが消えた。虚をつかれたように固まって、自嘲するように、歪んだ。

「辛いって、この状況で」

黒い瞳が泣き出しそうになって、そのままシエンを強く、強く睨んだ。

「だって。あなたはあたしを助けられないでしょ？」

耳に突き刺さるような声で叫んで、リタは駆け出していった。

夢を見た。父も、母も、弟も生きていて、父は弟に大きくなったら族長になるんだからとかめかしい声で諭している。私はそれを聞

いている。

父は私に「お前はなぜ男ではないのか」と、母には「なぜリタを男に産まなかったのか」と言い、時には母からも当たられて私は十歳まで育ち、弟が産まれてようやく重圧から解放された。

けれど代わりに待っていたのは、父の異常なまでの喜びようと、母の肩の荷が下りたような顔だった。父が喜べば喜ぶ程、私の中に疑問が降り積もる。何で私では駄目なのか、何で女だからというだけで私は必要がないのか。

弟は歳が離れているせいもあって、辛くあたったりすることはできなかつた。この子はまだ何も知らないし、何も悪くない。いつそのこと私がもつと幼かったら、八つ当たりすることも泣きわめくこともできたのにと、無邪気に私に懐く弟を見て余計に胸が苦しくなつた。

私はその日、シエンと日課の剣の稽古をしていた。剣の稽古をすること自体は自衛が必要な民族柄、文句は言われなかつたが、最近では年頃になるのだから女らしくしろと言われることが多くなり、私の尊敬の対象から父は完全に外れていた。あれだけ男に産まれてくればと言っておいて、後継ぎ問題が解決したから今度は女らしくしろとは一体何様のつもりなのか。

首の横に刃の平を突きつけられて、私はシエンを見上げた。

「俺の勝ち」

その顔があまりにも無邪気だったので、私は腹が立って顔をそむけた。

「何かあった？」

シエンは剣を収めると、私の顔をのぞきこんでくる。

「別に、何も」

「嘘だ。だつて負けたじゃん」

私は気持ちが乱れていると必ず負ける。さすがに昔から一緒にいる手前、ごまかしがきかない。

「ちよつと、嫌なこと思い出しながらだつたから」

シエンは一瞬不安そうな顔になって、すぐに柔らかく微笑んだ。
「今日うちにご飯食べにおいでよ」

シエンの家族は両親と妹がいて、とても居心地のいい家だった。小さい頃から世話になっていて、優しくしてもらえるのはもしかしたら族長の娘だからかもしれないが、シエンの性格を考えるとあの家族にはそうした打算は似合わないように思えた。

「迷惑じゃ、ないなら」

「迷惑じゃないよ。最近母さんがリタがうちの」

シエンは思い出したように言葉を止めた。

「うちの？」

「いや、何でも、ない」

シエンが頬を赤くして思い切りかぶりを振っているの、多分うちのお嫁さんに、とかそういう話だろうと思った。

シエンの母親に冗談で言われることは多いが、実際シエンの気持ちはどうなのだろう。そういう話になると今みたいに言葉を濁すし、あまりにも小さい頃から一緒にいるから、恋愛対象には入っていないのかもしれない。なら、私はシエンのことをどう思っているのか。考えたら、振って沸いたような爆発音がして体が跳ね上がった。音のした方を振り返ると黒煙が続々と上がっている。私は考えるより先にシエンとほぼ同時に駆け出していた。

黒煙が上がった場所は地面が焼け焦げて、テントの残骸とおそらく元は人だったものが黒くくすぶっていた。襲撃者の姿は見えず、これだけ広範囲を焼き尽くすことができるのは同盟を結ぶオウヴァの軍を除いて、異形の魔法しかない。私は焼け焦げた方向にある自分の家へ走っていった。

無事だったテントが増えてくるにつれ、今度は赤い水たまりに倒れた人々が比例して増えていく。鼻は焼けた匂いでとつくに麻痺して、私は倒れている人に構えずに自分のテントにたどりついて、入口を乱暴にめくり上げた。

そこには血だまりに伏せった父と、母と、尻もちをついて目の前

を凝視している弟と、背中に白い翼の生えた後ろ姿、異形が、いた。弟は私に気付いて、こわばっていた顔を歪めて走り出そうとする。私は制止することも、異形に跳びかかることも、できなかつた。

異形の長い剣が、弟の体を貫いた。引き抜かれた剣と共に弟の体は崩れ落ちて、目を開いたまま、倒れた。剣は血で濡れていて、どの血が誰のものなのか、分からなかつた。

異形がゆっくりとこちらを振り返る。私は恐怖か、自分が何に捕らわれているのか分からず、まったく体に力が入らなかつた。

異形と目が合う寸前、視界に何か飛びこんできて異形の背に刃を突き立てた。シエンが叫びながら異形に刺した剣を抜いてもう一度刺すと、異形は目を見開いて、咳きこんで血を吐き出した。

今、目の前で起こっていることが嘘のようだった。異形が地面に倒れたのを見て、私の目の前の景色は薄くなって、消えていった。

目が覚めると全て終わっていて、シエンが経緯を説明してくれた。襲撃してきたのは異形で人数は五人、目的は調査中、撃退はしたが三人は取り逃がし、こちらの死傷者は二百人中約百人、皇都の応援は間に合わず、埋葬の手伝いに終始したとのことだった。

目覚めた寢床の側でシエンが更に言い辛そうに目を伏せる。

「族長の親族がリター一人しかいなくなつたから、暫定でリタが族長つていうことに、なつた」

親戚も含めて皆殺されたのだと知つたのと同時に、運命の皮肉さに頭を殴られたようだった。あれだけ後継ぎにこだわっていた人達が全員いなくなつてしまつて、私だけが残つた。

まだ現実の实感がなく悲しみもやってこなかつたが、悲しくて動けなくなつてしまう前に、族長として今後の判断を示しておきたかつた。しばらくは同盟関係にある皇都の保護下に入ることになるだろう。リウ族だけで異形に戦いを挑むのは賢明ではない。そう、言おうと思つていた。族長として出席した最初の会議で、ローに発言されるまでは。

ローは私より先に私の考えとまったく同じことを言った。リウ族の中で既に撤退の意見が多数だったから至極当然だったが、ローが私に取り入って更に取りこもとうとしているのは明らかだった。更に、まわりの大人達が私にはなくローに同調しているということも。こんな小娘に族長を任せるくらいなら、前々から有力者の座を狙っている噂されていたローの方がまだましということだろう。

瞬間、私の中の熱は一気に冷めた。どうして自分達で族長を世襲制にすると決めておいて、私が子供で、女だから、いらんと言っているのだらう。どうしてここまで、私はいらんものとして扱われるのだらう。どうして私はここに、いるのだらう。

「リウ族は異形に報復する」

低い声で言うと、会議の出席者の間に無言の動揺が走り、皆怪訝な顔をした。末席で様子を見守っていたシエンも驚いた表情をしていた。

ここまで来たら、もう引き返せない。族長の立場は誰にも渡さないし、こんな風習のある一族など滅びてしまえばいい。心の中でそれはただの身勝手だと分かっている自分を封じこむ。その身勝手に私がどれだけ苦しんだか、私以外の誰も知らない。みんな私の苦しみと一緒に、死ねばいい。

その日を境に私はシエンを避けるようになった。みんなを道連れにしようとしている私は、もうシエンと口をきくのもふさわしくない。

襲撃された場所から森に近い皇都の近くへ移動して、ローと平行線の議論をしている内、皇都から四人組の使者がやってきた。完全に旗色は私に悪くなるばかりで、それでも私は諦める訳にはいかなかった。今折れてしまったら、私がここにいる意味はなくなる。

けれど、使者をもてなす宴の準備が整って、宴の場に案内するためにテントを訪れたら、中から声が聞こえてきた。

「ちなみに君は報復と撤退どっちがいいと思ってるの」
「撤退です」

シエンがいたのだと思ったのと同時に、初めてはつきりとシエンの意見を聞いて、突き放された気持ちになった。こんな時でさえも、まだシエンは自分の味方をしてくれるのではないかと思っていた自分に失望する。

「異形五人にあの様じゃ、勝ち目なんかない。でもリタも馬鹿じゃないんです、ちゃんと分かってます。でも報復しないと怒りを向ける場所がない。亡くなった人達に申し訳が立たないと思ってるんです」

まっすぐな言葉が胸に刺さった。何で、どうしてあたしを疑わないの。そんな綺麗な理由じゃなく、ただあたしは自分のためにみんなを道連れにしようとしているだけなのに。

「面倒くさい相手を好きだねえ、君も」

「ええと、いや、まあ、そうですね。はい」

照れたように、シエンが言った。あんたが好きなたたしはそんなに綺麗な子じゃない。好かれる資格も、今のあたしにはない。

「シエン」

テントの外から叫んだ。まだ声は震えていないはずだ。すぐに慌てたような顔のシエンが出てきて、私は用件を告げて走り去った。

今、聞きたくなかった。もう好きと言うこともできないのだと思うと涙があふれてきて、たくさん泣けば宴の時に感付かれると分かっている、こらえられなかった。自分で決めたことなのに、とてとても、辛かった。

辛い気持ちは一晩眠っても消えず、翌日も同じだった。剣の稽古だけは変わらずに続けていたが、一緒についてきた使者をシエンが親しそうに呼んだのを聞いて、胸の内が黒くなった。二人の間に特別な感情があるはずないと分かっている、私は不相応に嫉妬しているのだと、分かった。

当然こんな気持ちで勝てるはずもなく、すぐシエンに負けた。

「やっぱり休んだ方がいいよ。いつものリタらしくない」

「いつものあたしって、何」

シエンは困ったような顔をした。お願いだからもう放っておいて欲しいという気持ちと、それでもまだ気にかげられたいという思いが浅ましく交錯する。

「答えられないことなら言わないで」

言い終わる前にシエンにつかまれた腕の、力の強さに驚いてシエンを見上げる。

「辛い時、辛いつて言った」

ああ、どうして。シエンはどこまでもまっすぐで、綺麗だ。けれど私は私の復讐のために、このまっすぐな気持ちに返す言葉がない。

「辛いつて、この状況で」

言っではいけないと分かっているけど、鋭い言葉が心の中に沸き上がってくる。言えばシエンを傷付ける。ああ、でもそれで、いいのかもしれない。

だって。あんたはあたしを助けられないでしょう？

もう二度と話しかけられないように言葉を吐いて、駆け出した。何て悲しい、何て、無様。

けれどそれももうすぐ終わる。会議まで後少し、さあ、殺されに行こう。元より死にそこなった身なのだから、もうどうなっても、構わない。

会議は予定通り十三時から、広いテントに案内され私とギルとシディとレイジはローの隣に座った。

議論は平行線を辿るかと思っただが、リタについていた報復派の五人は比較的あっさり撤退派に転じた。おそらく武力行使の件があったからだろう。このまま意見がまとまらず先に皇都に潰されれば元も子もない。私達はここまでは発言することもなく、住人達の意見が飛び交うのを聞いていた。

リタを除く全員が撤退を表明した時、ローは私達も含めて多数決を取った。私達を含むリタ以外の全員が撤退に手を上げ、リタはた

だ一人報復に手を上げたが、リウ族は撤退する方針で皇都の保護下に入る事が決まった。

「リタ様、ここはどうかお収めください。報復しなかったからといって、誰もあなたを責めたりしません」

リタは暗く沈んだ目をローに向けて、糸が切れたように薄く微笑んだ。

「分かった。もういい。決定には同調する。その代わりに私の命令を一つ聞け」

「何でしょうか」

「私を殺せ」

言葉をなくした場に、ローの軽い笑い声が響く。

「ご冗談を」

「冗談はお前の方だろう。私を殺せば邪魔者はいなくなって族長の座も空く」

「何を仰ってるんですか。私は決して、そういう訳では」

「笑わせるな」

リタの叫び声が空気を裂いて、耳が痛くなる程、静まり返る。

「決定は飲む。だが私は絶対に撤退しない。撤退したいなら私を殺せ」

「リタ様、言っていることが無茶苦茶です」

リタは嘲る顔でローを見て、怒りよりも強い感情で黒い瞳を歪める。

「散々邪魔者扱いしておいて、殺せと言ったら殺せない。私はいないんだろう？ もうお前達の身勝手に振り回されるのはこりこりだ」

悲鳴に近い声で叫んで、リタの黒い目は泣き崩れた。リタが左腰に手をかけて、まずいと思った時に血の気が引いた。叫び声とざわめきが混じり合い、引き抜かれた銀色のナイフはまっすぐにリタ自身の首元に向けられて、そのまま。

電気が弾けるような音がして、リタは悲鳴を上げてナイフを取り

落とした。気付けばリタに向かってレイジが歩いていつていて、落ちたナイフを拾い上げてリタを見下ろしていた。

「あのさ、そういうお芝居は俺が帰ってからやってくれる？」

リタは涙で濡れた目を見開いて、信じられないものを見たようにレイジを睨みつける。

「レイジ」

声に非難の色をこめて立ち上がったギルに、レイジはわずかに振り返る。その目はいつもと違って、ひとかけらも笑っていないかった。

「何、ギル」

「公私混同すんな、仕事だぞ」

「してないよ。って、いや若干嘘か。でもさ、言わなきゃこの子分かんないよ」

「もういい、充分だ」

レイジは不満そうに目を細める。

「だからギルは甘いんだよ」

レイジはリタの方に向き直る。

「俺、君みたいな子嫌いなんだ。わがままで、潔癖で、自分が一番不幸だと思つてて、でもその不幸に酔つてる」

「おい」

ギルが怒鳴つてレイジの方へ歩いていく。

「あんたにあたしの気持ちなんか分かる訳ない」

涙混じりの叫び声を前にして、レイジは顔色一つ変えない。

「分かんないね、他人だから。でも嫌いなんだ。ただそれだけ」

「やめて下さい」

ギルがレイジの腕を思い切り引いたのと、叫び声が割って入ったのは同時だった。シエンが駆けてきて、リタとレイジの間に立ちはだかる。

「何で分からないのにそういうことを言うんですか。分からないなら何も言わないで下さい。リタがどんな思いをしてきたか知らないのに、あなたにそんなこと言われる筋合いない」

レイジは呆気にとられたような顔で固まって、思い出したように笑い出した。

「そう言われると辛いなあ」

ギルがレイジの腕を引いて無理矢理こちらへつれてくる。シエンは険しい表情を崩さないままで、レイジが戻るとリタの方に振り返ってその場にしゃがみこんだ。

「リタ」

リタはうつむいて、泣くのを我慢しているのだろう、体が震えていた。シエンは膝の上で爪を立てているリタの手を握って、顔を伏せたままのリタをまっすぐ見つめた。

「結婚しよう」

多分、この場にいる誰もが驚きで言葉を飲みこんだ。リタでさえも顔を上げて、訳が分からないといった風にシエンを見つめている。「俺と結婚すれば族長は多分俺になるけど、俺はリタの言うことを無視したりしない。体制上は俺が族長になっても、リタは族長らしく振る舞えばいい」

シエンは困ったように微笑んで、もう一方の手でリタの肩を軽く叩く。

「なんて、こんなの俺の自己満足かもしれないけど、でもリタが好きなんだ。だから、リタが必要なんだよ。それだけ」

リタの唇が開きかけて、目に涙がいつぱいにたまっていつて、しやくり上げたのと同時にこぼれ落ちた。シエンがリタの背を抱き寄せると、リタは声を上げて、泣き出した。

リタの泣き声は積み上げられてきた事情を知らない私にも感じ取れる程痛く、同時に切なかった。けれどきつとこれからは変わっていくのだろうと、泣いているリタと、リタを抱きしめるシエンを見て思った。

「ほら、やっぱりけしかけといて正解だったじゃん」

立ったまま不満そうに呟いたレイジをギルは冗談のない目で睨みつけた。

「ふざけんな。自重しろ」

レイジは鬱陶しそうにギルを睨み返したが、顔をそむけながらも「はあい」と返事した。

突然めくり上げられた入口の布の音に反射で振り返ると、私も、場の空気も凍りついたのが分かった。

茶色いブーツが砂を踏みしめる音が大きく耳に残る。静かな場で自分の心臓の音が強く、速くなったのがはつきりと意識できた。

「失礼。ノックする場所がなかったからな、多少の無礼は許せ」
若葉色をした鋭い目と目が合って、強く微笑まれた。

白いタンクトップとズボン、毛先の跳ねた金髪、右腕に金色の腕輪をたくさんつけて、左腕のひじから先は白い鳥の翼を持った男性が嘲るような笑みを浮かべて、立っていた。

熱、自責

4 熱、自責

「何しに来た」

ギルの鋭い声で固まった体が現実には引き戻される。

「知ってるの？」

レイジが隣のギルを振り向いた。

「この間会ったばっかだろうが。ってお前いなかったのか。後で話す」

「そう苛立つな。戦いに来た訳じゃない」

異形は不機嫌そうに眉をひそめる。

「信用できるか」

戦いに来たのではないのなら、何のために来たのか。私を連れていくためだろう。

「まあいい、先日は手違いで迷惑をかけた。ここを襲った兵士達が、命令を無視してうさ晴らしにやったことだと証言した」

何のことを言っているのかと思ったら、リウ族が異形の襲撃にあったことを指しているのだと分かった。

「意外だな。謝罪する異形なんて聞いたことないぞ」

「こんなことで揚げ足を取り合うのも面倒だからだ。ここへの攻撃は何の得にもならないし、無駄に疲弊しただけだ。俺の指導力がまだ足りないという教訓にはなっただがな」

「うさ晴らしで殺された仲間の無念をどうしてくれるんだ」

住人の中から男の叫び声が上がると、異形の目は険しくなった。

「だから謝罪しているし、当事者達は嚴重に処罰した。ただ、この人間はどうだか知らないが、異形の軍も同じようなことをしている。お互い反省すべき点があるということだ」

言われて初めて、自国の軍にもそういう側面があったことを知っ

た。無知と言われればそれまでだが、心の中ではやはり自分達は異形と違うと思っていて、少なからず苦い思いが広がる。

「話がそれだな。俺達の狙いはあくまでも皇帝の首と、それだ」

異形の指はまっすぐに私を指し示して、私はせめて震えないように力を入れた。

「いや、今の一番はそれか。皇帝の首などそれを手に入れた後でどうにでもなる」

「言いたいことはそれだけか？」

ギルを見て、異形は吐き捨てるように笑った。

「それを渡せ。無駄な戦闘はしたくない」

「人をそれとか言う奴に渡すか馬鹿。まず自分から名乗れ」

「ルリオステイーゴだ」

聞き覚えのないその名前に、シデイの目が見開かれたのが分かった。

「うわ、ついてない」

レイジも苦々しい声を出す。多分私以外の人は知っているのだろう、重要な人物には違いない。

「わざわざご苦労なことで」

ギルが刺々しく言い放つと、ルリオステイーゴは薄く笑った。

「今一番必要なのはそれだと言っただろう」

一瞬、私が大人しくついていけばこの場は収まるのではないかという考えが頭の中をかすめた。けれど、私は単純に怖い。それに、ついていってもその後には攻撃されないという保障もない。

「アリア」

呼ばれて、私はギルの背中を見た。

「行くなよ」

ギルの言葉はそれだけで、でもそれは私の身を案じたものではなかったのだとしても、嬉しかった。

「はい」

私は力をこめて返事をした。ギルがいいと言ってくれたのなら、

私はブリューテ・ドウタとしてこの場を戦っただけだ。

「ギルかっこいい」

「あほか。外の指揮と連絡は任せる」

「はいはい。了解」

レイジは住人達を振り返って、リタの方を見た。

「こつちの都合で悪いんだけど、俺達の指揮下に入ってもらおうよ」

リタはシエンに支えられるようにして立ち上がる。

「分かってる。ここで公私混同する程馬鹿じゃない」

「そんな減らず口叩けるんだったら充分だね」

レイジはいつものように笑った。

「大人しく渡す気はないということでもいいか？」

ルリオステイゴは特に表情を変えず、ギルを見つめる。

「ない。これっぽっちもな」

「なら奪うまでだ」

ルリオステイゴの左腕、白い翼が揺らめいて見えて、人の腕の形になったのと、ギルが踏みこんだのは同時だった。

ルリオステイゴが左手に持った銃はギルの目の前に向けられていて、ギルも銀色の銃をルリオステイゴに向けて、お互い動かなかった。

「とうとう火器を導入したのか」

ギルが低い声で言うと、ルリオステイゴは自嘲ぎみに笑った。

「魔法至上主義の頭の固い連中を説得するのに時間がかかってな。今こちらで作れるのはこのくらいだ」

ルリオステイゴがギルに向けているのは自動式ではなくリボルバーだった。弾数は少ないけれど、これだけ至近距離で撃たれればどんな銃でもただではすまない。

何か、相手の気をそらすものを。魔法は詠唱を破棄してもおそろく魔力に気付かれて防がれる。そう思ったら思い出した。

私はなるべく魔力を抑えて、左手の指先に意識を集中する。詠唱はせずに、心の中で呪文名を唱えて発動させた。

指先から水がしたたり落ちる前に、私は駆けてルリオスティーゴの前に左手をつき出した。全力で解放した水にルリオスティーゴが押し流されたのが見え、テントが大きく揺れて私は体勢を崩しながら銃を抜いた。

「上出来だ」

ギルは振り返って笑うと、そのままレイジに向き直る。

「レイジ、正面突破する」

レイジはあまり驚いた様子も見せずに腕を組んだ。

「籠城は？」

「ここじゃ強度が知れてるだろ。他に浮かばない」

レイジは考えるように目を細めて、腕をといた。

「まあギルがそう言うんだったらいいや」

「シデイ、陛下に連絡。レイジはリウ族の指揮、アリアは俺と先頭を切る。増援まで持たせるぞ」

みんなそれぞれに返事をして、私も返事をする。

「先陣が落ち着いたら外に出るけど、相手は魔法と飛び道具だから無理しないこと。シデイと族長とシエンは戦えない人の保護に回って」

レイジがリウ族を振り返って早口に言うと、リタが声を上げる。

「何であたしとシエンを外した」

「あのね、ここで死んだらさつきしたお芝居の意味がないでしょうが。族長なんですよ？」

リタは目を開いて、唇を結んだ。

「そっちの娘をおとなしく渡せば助かるんじゃないのか」

「アリアを渡しても殺されない保証なんてない」

誰かの呟きを切るようにギルが声を上げる。

「考えれば分かるだろ」

ギルの声は低く、とがっていた。

多分、謝ったらギルはもつと怒る。だから今は戦うことだけを考えるしかない。けれど、それでもいたたまれない気持ちは少しだけ

薄れた。

「はい、怒らない怒らない。急ぐんでしょ」

レイジがギルの肩に手を置く。

「逃げてもいいですよ。逃げられるものならね」

レイジが笑顔で放った言葉は、リウ族の中に居心地の悪い空気を作って消えた。

ギルは機嫌が悪そうに自分の髪を撫でて、私の側へ来る。

「そもそもの原因は異形だ。気負うな」

ギルの金色の目は強くて、私は声を出して頷いた。

「詠唱だけしておいて、外に出たらエカザ（消滅呪文）撃つて。囲まれてるから」

「じゃあ先に出ます」

ギルは何か引つかかったのか苦悩したような表情をしたが、すぐに頷いた。

『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願ひ』

手を下ろしたまま詠唱を始める。行くなと言ってもらえた、ただ、今はそれだけでいい。

『この視の先を消滅させる』

左手に魔力が集まったのを感じて、ゆっくりと手を閉じた。

「行くぞ」

ギルの声はよく響き、私は頷いてテントの外へ駆け出した。

薄闇の中、たいまつのように明かりに照らされて、十数人の異形がテントを囲むように銃を構えていた。

『エカザ』

動かれる前に手を横にふるって、目がくらむ程の白い光を放つ。

異形達の悲鳴が聞こえるのと同時に砂埃が舞い上がって、心の中で舌打ちした。視界のことまでは考えていなかったと思っただら、すぐ近くから銃声が聞こえてきて体がすくんだ。

「好きなだけ撃て」

隣からギルの声が聞こえて、硬直が解ける。私は力いっぱい返事

をして左手を砂埃の中にかざした。

『二一〇』

ただ撃っていればいい分、こちらの方が有利だ。異形は私を殺せないから、撃ちながら盾になればいい。隣でギルは怖い程静かなまま正確に異形を撃ち抜いていく。

砂埃が収まって、立っている異形が一人もいなくなった時、土の匂いと焦げた匂いが急に鼻について、静かになった。

後ろから足音が聞こえてきて、振り返るとレイジとリウ族の面々がテントから出てくるところだった。

「終わり？」

レイジが声を投げると、ギルは弾倉を交換しながら振り返る。

「まだ。あいつがない」

あいつとはルリオスティーゴのことだろう。確かに姿を見ていないし、これくらいで引き下がるとは思えない。

ふと頬に冷たいものがあたって空を見上げた。まったく気が回っていないかったが、闇にまぎれて灰色の雲が頭上を覆っている。

「雨か」

「恵みの雨になるといいんだけどね」

ギルは何も答えずに弾倉をはめこんで銃身をスライドさせた。

体が痺れるような感覚に、私は反射で異形が倒れた方向に魔法を撃っていた。詠唱破棄した水球に明らかな魔法がぶつかって、爆発した魔力の衝撃に顔をかばう。

すぐに目をこらすと、テントの影から続々と異形が現れて、まわりを囲まれていく。その中心には、左手に銃を下げ、右手に空気を威圧する程の魔力をこめたルリオスティーゴがいた。

異形達が銃を構える音に、私とギルはルリオスティーゴに銃を向ける。詠唱破棄した魔法で相殺できたのだから、魔力では決して負けていない。気圧されてはいけない。

「最初から俺が出るべきだったな」

ルリオスティーゴが独り言のように呟くと、ギルは銃を向けたま

ま「そうだな」と返した。顔を叩く雨が強くなってきて、水滴が頬を滑り落ちるが、拭っている余裕はない。

ふと、遠くから馬のいななきが聞こえてきて、耳に意識を集中した。一つや二つではない。異形の援軍か。焦燥感が胸を支配して私は奥歯を噛んだ。

「皇都の援軍だ」

ギルが私にしか聞こえないくらいの声で呟いた。囲まれた異形の隙間から荒野の向こうに目をこらすと、雨と馬に混じって黒地に金色の鳥の翼が描かれた旗がはためいているのが見えた。

連絡を受けてから到着するのが早すぎる。まさか最初から待機していたのか？ こうなることを知っていた？ 不信感が募ったが、すぐに心から消した。ギルは驚いていないから、今は気にしている場合ではない。

ルリオステイゴの口が小さく動いた。魔力が増幅しなかったから、気が付かなかった。まずいと思った時に呪文はもう間に合わず、私は銃の引き金を引く。

『ワプラ』

ルリオステイゴが皇都の援軍に手を向けたのと同時に、ルリオステイゴの前で魔法が弾けて銃弾が消される。

空を裂く雷と同じ音と、一斉にこちらへ放たれた銃声が混じって頭が真っ白になった。

名前を叫ばれて、私は地面に倒された。覆いかぶさられた体の重みを感じて、我に返る。

『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願い この視の先を消滅させる
エカザ』

地面に伏せつたまま、異形の方へ撃った。爆発音と共に白い光で目がかくらんだが、地面から起き上がって私に覆いかぶさっている体を支える。

「ギル」

叫ぶと、ギルは顔を歪めながらも首を振る。

「ほとんど当たってない、心配すんな」

「アリアちゃん、もう一発撃って」

レイジが叫ぶのが聞こえて、再び始まった銃声に私は早口で呪文をつむぐ。

『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願い この視の先を消滅させる
エカザ』

白い光の合間にレイジがギルの側へ駆け寄ってくる。

「ギル、撤退しろ」

ギルは厳しい目でレイジを見上げる。

「援軍は」

「今ので多分半数くらいになった。あいつの魔法が強すぎる。あいつの狙いはアリアちゃんだ、一旦逃げろ」

ギルは苦悩した表情になって、すぐに立ち上がった。

「森に逃げる。アリア、回復、詠唱破棄でいいから」

私は返事をしてギルにノゼリオ（回復呪文）をかける。

爆発の余韻が収まった景色を見ると、立っている異形はルリオステイゴを含め十数人、その向こうには数を減らされながらもこちらへ向かってくる援軍の姿が見える。

「落ち着いたら合流する」

ギルは言って、私の腕を取って駆け出した。

『追え』

ルリオステイゴ自身も異形と共に走り出し、こちらに迫ってくる。

『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願い この視の先を破壊する
ガヤド』

ルリオステイゴは背後から撃たれた魔法を振り返り、電気で相殺する。

「あなたの相手は俺がしますよ」

続けて銃を撃ったレイジにルリオステイゴは魔法で銃弾を防ぎ、吐き捨てた。

「貴様。何のつもりだ」

「アリア、レイジに任せろ」

目の前にギルに叫ばれて、私は遅れて返事をした。私達を追ってくる異形達から魔法が放たれて、私は早口で詠唱する。

『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願ひ この視の先を消滅させる
エカザ』

何度目かの白い光に目をかばって、私は今度こそ前を向いた。強くなった雨の中に霞む黒い森へ、ギルの背中を見ながら走り続けた。

森に入るとあたりは物の輪郭しか見えない程暗かった。更に夜になれば何も見えなくなるのだろう。空を覆う木の葉で雨は届かないが、時折水滴が降ってきて顔に当たる。

何度目か、ギルも私も地面に足を取られ、歩みが遅くなった。私は途中から肉体強化に魔力を使ったからそれ程でもないが、ギルの息は普通では考えられない程荒く、速い。

少し休みましようと言いかける前に、ギルは歩幅を緩めて膝に手をついてしまった。私は慌ててギルの体を支えるように手をかける。

「ギル、傷は」

「数発かすった、だけ。けどやっぱり弾に細工してやがる。すげえ、だるい」

息の中に消えそうな声に鼓動が速まる。オウヴァ製の銃弾も傷口にノゼリオ（回復呪文）やロザリオ（浄化呪文）が効かないように魔力がこめられていて、そこに毒を塗ったりする。

私は詠唱破棄せずにロザリオ（浄化呪文）とノゼリオ（回復呪文）を唱えてギルの体に触れた。私の魔力でも完治はしないだろうが、何もしないよりはましだ。一旦どこか休める場所を探さなくては。

ギルは呼吸を落ち着けるように顔に手を当てて、ゆっくり体を起こした。

「ありがと、ちょっと、楽になった」

何も言えずにいると、ギルの手が頭の上に置かれる。

「心配すんな。死ぬ程じゃない」

私はやつとの思いで小さく返事をした。

「もうちょい歩いて休めそうな場所探そう」

私は返事をしてギルの腕を支えて前へ出た。

段々と暗闇が濃くなってきた。しばらく歩いていくと、削れた山肌に私の背丈と同じくらいの穴が開いているのを見つけた。ギルと一緒に立ち止まるが、暗くて当然中の様子など見えるはずがない。

「横穴でしょうか」

「照らしてみる」

ギルが穴の方へ手をかざしたのを見て、私は手で制す。

「ニ一口（炎呪文）でいいんですよね？ やります」

「燃やすなよ」

ギルが少し笑ったのが分かって、私はむくれた。

「もう力の加減は大体覚ええました」

私は穴の方へ手をかざして左手の魔力を絞る。

「ニ一口」

手の平に灯した炎で穴の入口を照らしてみると、ここからではまだ奥が見えなかった。念のため足元の石を拾って穴の中に放つてみると、かなり音が反響して聞こえる。

「入るか。もう暗いし」

確かに暗くてこれ以上は歩けないだろう。私は手の平に炎を灯したまま、ギルの腕を支えて中に入った。

「頭、気を付けてください」

入ると急に空気が冷たくなって、湿ったスーツのせいで余計に寒く感じる。何が出てきてもいいようにあたりの魔力に集中して歩いていくと、大きく開けた場所に出た。

土が固まったような壁が高く上まで続いていて、見上げるとうっすらと木の枝と葉が見えた。飛べないと届かない高さだが、上は外に繋がっているようだ。

「ここでもいいですか？」

言つと、炎に照らされたギルは頷いた。

「たき火作りたから枝拾つてきてくれる？」

私が返事をする、ギルは小さく呪文を唱えて自分の指先に炎を灯した。

私は来た道に戻つて、穴の入口で枝を抱えられるだけ拾った。夜はここで明かすことになるのだろうが、今後どういう風に動くのかギルに聞いておかないと。

左手に炎を灯して穴の中に戻ると、地面に小さなたき火ができていて、ギルは壁にもたれて座っていた。けれどその指がワイシャツのボタンを外しているのを見て、私は驚いて体が固まった。何をしだすつもりなのかと思つたら、ようやく思い当たつて私は枝を置いてギルに駆け寄る。

「傷、見せて下さい」

ギルは何も言わずにワイシャツを脱いだ。

「このこと、ここ、あと背中」

ギルが指差したのは左の二の腕と脇腹で、肌がえぐれて血がにじんでいた。命に関わらないとしても、放っておいていい傷ではない。

『世界の続き 白に包まれ この身の先を回復する』

左手に集中してできる限りの魔力をこめる。

『ノゼリオ』

腕の傷口に手をかざすと、薄緑色の光が広がり、傷口に吸いこまれていく。普通なら時間を早送りしているように傷口が塞がっていくが、やはり何も変わらない。

銃弾にノゼリオ（回復呪文）を無効にする魔力をこめるには、人の魔力を機械で加工しなければならぬ。それと同じように、効果を消し去るには人の魔力だけでは駄目なのだ。

「一応さつき薬飲んだから、後でまたかけて」

辛いはずなのにギルは笑つて、白いハンカチを広げて細長く裂き始めた。

薬で無効の効果を抑えても打ち消せるのはよくて二十分の一、け

れど薬が効いている間に回復を続けければ、完治まで持つていくはずだ。

「傷口、洗いますか？」

ギルは私を見て少し困ったような顔をした。

「魔力、あとどれくらい？」

返された質問に私も言葉につまる。

「まだ、あります。大丈夫です」

「何パーセントくらい？」

ここで嘘をつくのは簡単だ。けれど嘘は本当のことを知られた時が怖いから、苦手だった。

「七十パーセントくらいです」

ギルは意外そうな顔をした。あれだけ魔法を撃ったから、ほとんど残っていないと思ったのだろう。

「実質、私が魔法を使えなくなるのは魔力がなくなった時じゃなくて、疲れた時なんです。魔力の分撃ち尽くすより先に体力がなくなるんです」

私の魔力は黒の鳥と繋がっている。そして黒の鳥もどこかへ繋がっている。はっきり感じ取ることにはできないのだが、『世界を壊す』という事象そのもので、そこには魔力が渦巻いている。

「本当に？」

ギルにつめ寄られて私は驚いて体を引いた。

「本当ですけど、何ですか」

「いや、本当ならいいんだけど。魔力の残り嘘つかれても後が困るだろ」

「それは、大丈夫です」

嘘をつくのは苦手だが、黒の鳥のことは言えない。世界を壊す存在と知られて、ここにいらなくなるのはとても、辛い。

私は初めて、黒の鳥を具現するこの体が嫌だと思った。今まではきつと、最初から私を受け入れてくれる人とししか関わっていなかったから、感じなかった。

けれど嫌われたくない、恐れられたくない、みんなの側に、いたい。

「じゃあ洗ってもらっていい？」

ギルに言われて、私は頷いてギルの腕を取った。指先から魔力を絞ってオスタ（水呪文）を唱えたら、今ここにいられるのはこの力のおかげなのだと思うって、気持ちがない交ぜになった。

「だるいのはどうですか？」

私は自分のハンカチを裂いて傷口のまわりの水を拭き取った。ギルから細く裂いたハンカチを受け取って、腕の傷から巻いていく。

「だるい。正直痛いよりこっちの方が辛い」

「薬は」

「さっき飲んだ」

無効を打ち消す薬と一緒に飲んだのだろう。少しでも効いてくれればいいと思つて、私は脇腹と腰に巻くために、裂いたハンカチの端と端を結び始める。

「でも俺、魔力抵抗は異常に高いからさ。普通だったら多分動けなくなってるけど、動けてるし。あいつが皇都に来た時も殺すつもりで撃つたつて言ってたけど、死ぬ程じゃなかったし」

あいつとはルリオステーキゴのことだろう。確かに皇都でギルにワプラ（雷呪文）を撃つた時、そんなことを言っていた。

「手加減したんじゃないんですね」

「手加減する意味がないだろ。つて思ったけど、されてたら嫌だな」
ギルは自嘲ぎみに笑った。

「腕上げて下さい」

私は細長くつないだハンカチをギルの脇腹と腹を覆うように巻いた。

「ありがとう」

包帯代わりのハンカチを巻き終わると、ギルは微笑んでワイシャツを拾い上げる。

「ごめん、なさい」

言わずにはいらなかった。多分ギルは怒るだろうと思っ
ても。案の定ギルは表情を曇らせる。

「アリアのせいじゃない」

私は頷く。

「違うんです。私が言わないと、嫌だったんです」

ギルは表情を曇らせたまま私の頭に手を置いて、困ったように笑った。

「アリアがいなくなると困る」

胸がしめつけられた。たとえそれが黒の鳥の力を言っているのだとしても、今は素直に受け取っておきたかった。

「これから、どうするんですか」

ギルは私の頭から手を離して、ワイシャツに袖を通した。銃弾がかすった部分が裂けて赤黒く染まっている。

「とりあえず明け方まではここにいる。電信機使いたいんだけど絶対待ち伏せされてるしな」

「ここじゃ繋がらないんですか？」

「森出ないと繋がらない。森の中で魔力が狂ってるから。だからあつちも俺達の魔力をたどれないし、逆に俺達も分からない」

少しあたりに意識を集中してみたが、確かに空気に含まれている魔力の揺らぎさえもつかえなかった。感じられない。

「とりあえず明るくなってきたら森の出口に近付く、かな。援軍来てるかもしれないし。まあ、さすがに夜襲はされないと思うよ。さつきも人質は取らなかつたし」

「人質を取らないのと夜襲されないのとどんな関係があるんですか？」

「王様の誇りってやつじゃないか」

「王様って、あの人がですか？」

ギルはワイシャツのボタンを留めながら意外そうな顔で私を見る。
「ルリオステイゴ、異形の王だ。知らなかつた？」

ああ、だからシデイもレイジも名前を聞いた時反応したのか。

「あの人、王様だったんですね」

ギルは頷いてシオルダーホルスターをつける。

「会議の時陛下が言ってた。前々から王が代わりそうな気配があつて、有力視されてたのがルリオステイゴだ。顔は知らなかったけど。元々羽のある異形は王族に近くて、腕が羽の異形は王族だし」

ギルの言葉を聞いて私は鼓動が速くなった。私の翼は異形とは違う。けれど。

木の枝がはぜる音で、たき火が小さくなっているのに気付いて枝を足した。湿っていて火が移らなかったので、指先に炎を灯してあぶってからくべる。

ギルが近付いてくる音が聞こえて振り向くと、頭の上に手を置かれて驚いて声を上げていた。

「はい」

ギルが差し出したのは、キャラメルだった。

「あ、りがとう、ございます」

私はギルの手の平からキャラメルを受け取る。包みを開けようとしたところでふと気付く。

「ギルの分は」

「いいよ、食べて。俺菓飲んだし」

そういう問題ではないと思うのだが、思い出して私はスラックスのポケットを探った。リウ族のところで余分にもらった一個をポケットに入れていたのだ。

「ギルも食べて下さい」

私はポケットに入っていたキャラメルをギルに差し出した。ギルはキャラメルを見て、私の方を見て、微笑む。

「ありがとう」

キャラメルは口に入れるとやっぱり甘くて、けれどその甘さがかえって落ち着いた。

キャラメルを舐めていると会話がなくなって、ギルは壁にもたれ

た。

「少し寝ていい？ 三時間たったら起こして」

「ずっと寝てていいですよ」

「そしたらアリア寝れないだろうが。それにその頃には薬効してるだろうから、回復かけられるようだったらかけて欲しい」

ああ、そういうことか。私は頷いた。

「ごめん、じゃあ、よろしく」

ギルは壁にもたれたまま目を閉じた。

あまり音を立てないように懐中時計を取り出して見てみると、もう七時になっていた。何もせずに三時間すごすのは意外と辛いことに気付いて、何かいい方法はないか考えていると、ギルが目を開けてこちらを見ていた。

「あ、すみません、うるさかったですか？」

「いや、そうじゃなくて」

ギルは言い辛そうに目を伏せる。

「あのさ、肩貸してもらっちゃ駄目？」

一瞬、意味が分からなくて私は首をかしげた。

「肩って肩ですか？」

私は自分の肩を指差すと、ギルは曖昧にうなりながら頷く。

「いいですけど」

「や、壁痛くて」

尋ねていないのに理由を言われたので、何か思うところがあるのかもしれない。私はギルの隣に寄って壁に背をつけた。

「重かったらどいていいから」

「それじゃ意味ないじゃないですか」

「あ、うん、そっか」

ギルは小さく返事をしながら私の左肩に肩を寄せた。

目を閉じたギルの顔が何だか可愛くて、私はギルの頭の上に手を置いていた。ギルが弾かれたように私を見て目を丸くする。その顔は気のせいではなくて、赤く染まっていた。

「いつもこうやってされるから、お返しです」

私はギルの髪を撫でて笑った。ギルは赤い顔のまま居心地が悪そうに視線をそらして、目を伏せた。

夢を夢と気付くのは眠りが浅い時で、今も私は森の中をさまよっていたから、夢だと分かった。私は横穴でギルと一緒に休んでいたはずだ。

目を覚まそうとした瞬間、景色が真っ白になって、声が聞こえた。
『そこか』

私は自分の体が跳ねるので、覚醒した。とつさにホルスターから銃をつかみ出してあたりを見るが、たき火が小さく燃えているだけだ。

すっかり眠ってしまったと思って、銃をしまって懐中時計を取り出そうとしたら、左肩で眠っているギルが小さくうめいた。様子がおかしいと思って見ると、穏やかに眠っているとは言いがたく、息が速く、浅い。

『世界の続き 白に包まれ 鳥に願い この身の先を浄化する 口ザリオ』

ギルの左肩に触れて浄化の呪文をかけると、ギルは薄く目を開けた。

「ギル、回復かけます、だるいのと痛いのとどちらですか」

金色の目が虚ろなまま私を見て、伏せられる。

「だる、い。てか、寒い」

まさかと思って額に手を当ててみると、はつきりと分かる程、熱かった。

「ごめんなさい、ちょっと傷見せて下さい」

私はギルの体を支えながらシオルダーホルスターを取って、ワイシャツのボタンを外した。血で染まった左腕の包帯を取って、濡れた傷口に手をかざす。

『世界の続き 白に包まれ この身の先を回復する ノゼリオ』

薄緑色の光は傷口に吸いこまれて消える。けれど、変わらない。もし薬が効いていたとしてもノゼリオ（回復呪文）の効果は二十分の一になっているから、まだ分からない。そう思って私は続けて十数回ノゼリオ（回復呪文）を唱えた。

私は傷口にかざしていた指先を握りしめる。少しは塞がってもいいはずの傷口は痛々しいまま血をにじませている。

薬は軍内で仲間を誤射してしまった時のためのものだから、おそらく今回異形が導入してきた火器は魔力のかかり方も、毒の種類も違うのだ。

ギルの速い息の音が耳を塞いで、息が止まった。駄目だ、考える。まだギルの症状を軽くする方法が絶対にある。

私は思い出して、さっき見なかった懐中時計を見た。十一時五分で、眠ってしまう前から四時間たっている。薬は通常なら三時間程度で効き始めるので、やはり効かないのだろう。薬には頼れない、それなら一体どこから回復させれば。

ふと、懐中時計を持った右手を見て、白い包帯と、レイジの言葉が繋がった。

「ギル」

私はギルの肩を軽く叩いた。閉じていた金色の目がつつすらと開かれる。

「魔力移しさせて下さい」

私の言葉でギルの目ははつきりと私を見た。

異形に右手を折られた時、魔力の液体に投げこまれて一瞬で治ったことを思い出したのだ。あれは大量の魔力が体の中を通ると、体が組織が活性化して回復が促進されるということだ。だから私の魔力をギルの体の中に通せば、少なくとも今よりは症状が軽くなるはずだった。

「魔力移しって、口移し？」

私は頷く。

「あの、さ、それ本気で言ってる？」

「本気です」

「今、冗談受けてる余裕、ないんだけど」

「冗談言ってる場合じゃないでしょう？」

私は思わず声を強くしてしまった。

「動力炉で異形に手を折られた時、魔力の水の中につかっで一瞬で治ったんです。だから、私の魔力をギルに渡せば、少しはよくなると思うんです」

ギルは息をついたまま私を見つめていた。

「分かった、けど、嫌じゃないの？」

ああ、この期に及んでこの人はまだそんな心配をするのか。けれど最初に会った時もそうだった。私の黒い翼を見て、痛いからもういいと、言った人だった。

「嫌じゃないです」

私はギルの前に近付いて、膝立ちになる。

「ギルが辛い方が、嫌です」

ギルの両肩に手をかけて、唇を合わせた。

口の中に魔力を集めて、唇の隙間から流しこんでいく。魔力移しなどしたことがないから、上手くできていくか分からない。それに、異形の言っていた通り体に収められる魔力には限界があるから、あまり魔力を送りすぎるのもよくない。

足りなかつたらもう一度少しずつ送ればいいと思って口を離そうとしたら、ギルの腕に腰を捕まえられた。驚いて顔を離すと、背中を抱きしめられて、膝が折れた。

私が見上げる形になって混乱した頭で名前を呼ぼうとしたら、口を動かす前にギルの顔が近付いて、唇が触れた。

魔力移しても何でもなく、ギルの指が頬から耳に触れていって、火がついたように体が熱くなった。さっきまでは感じなかった。けれど今は、触れられている頬も、合わさった唇も、熱い。

ギルの肩を握ってしまって、ギルは気付いたように顔を離す。目を見ることができなくて顔をそらすと、背中を抱かれて息がつか

た。

どうすればいいのか、分からない。具合はよくなったのかとか、尋ねることはあるのに、声が、出ない。ただ自分の速い鼓動の音だけが続いていって、ギルは少し腕を緩めた。

「アリア」

呼ばれて、体が跳ねた。やっぱり顔を上げることができずにいると、頬を包まれて私と同じ目線の高さまでのぞきこまれる。ギルはためらうような顔で私を見つめていて、私は視線をギルの首元に移した。

「好きだよ」

何を言われたのか分からなくて、私は驚いてギルの目を見た。金色の目と目が合うと、ギルは困ったように微笑む。

「こんな時にごめん。でも、好き」

私は、言葉に対する返事を持たなかった。こみ上げてくる言葉はたくさんあるのに、何を言えばいいのか分からない。

「ギル」

ようやく名前を言って、そこで思考がかき消された。

小さく響いた靴音に、振り返って反射でホルスターから銃を抜いていた。ギルも銃を取っていて、穴の入口へ向けて立ち上がる。私も立ち上がって、入口へ向けて両手で構えた。左手は魔法を撃ちやすいように魔力を集めておく。

入口の暗闇から聞こえてくる足音はおそらく一人で、敵か味方が分からない。

けれど先程の夢で見た白い景色が今更頭の中で繋がって、私はとっさにギルより前へ出た。

「ワプラ」

空気を裂いて目の前に迫る電気の光に左手を振るう。

「オスタ」

光の前に放った水の中で火花が弾けて、目をつぶった。

音が収まって目を開いた先には、やはり、ルリオステイゴが立

っていた。左腕は翼ではなく、人の腕で銃を下げている。

すぐに撃つてしまえばよかった。けれど、それでも劣勢に追いこまれそうなので、撃つのをためらった。

「どうやって探り当てたか聞かないのか」

ルリオステイゴが言う。言葉は私ではなくて、ギルに向けられている。

「どうせまたアリアの夢に入ったんだろ」

「ご名答」

ルリオステイゴは薄く笑って、銃を上げた。

ギルが連続で撃った。ルリオステイゴは壁際を走り、リボルバの銃口がこちらへ向けられて私は反射で唱える。

『アリス』

ルリオステイゴが右手を突き出す。

『アリス』

風は風に相殺されて、突風を作り出す。風の中、ギルに腕を引かれて私は壁に背を打ちつけた。

銃声が三つ聞こえて、静かになった。ギルは私をかばうように立っていて、崩れるように片膝をついて、体を折る。

銃を下ろしたルリオステイゴが血まみれの手でギルの手から銃を取り上げて、遠くへ投げ捨てた。反動でギルの体は力を失ったように、地面に倒れた。

ギルを越えて、ルリオステイゴがこちらへ来る。私は銃を構えていた。けれど手も、足も震えていて、力が入らない。引き金を引いたのとルリオステイゴに手をつかまれたのは同時で、弾は空しく中空を切る。

「来い」

「ギル」

やっと、呼べた。体が震えているのは、ルリオステイゴを恐れているからではない。ギルがどこを撃たれたか、私は見ていない。

「脚を撃つただけだ。こっちも腕を持ってかれたんだから同等だろ

う」

つかまれた手にルリオステイゴの血が伝ってきて、私はもう一度銃を撃った。

『ワプラ』

体中に痛みが走って、力の入らなくなった手から銃が落ちた。崩れる体をルリオステイゴの腕に引き上げられる。

「運ぶのは面倒だ。封印をかけるから自分で歩け」

私はせめても精一杯視線に力をこめて、ルリオステイゴを睨んだ。

「嫌です、ついてなんか、いけない」

ルリオステイゴの瞳が不機嫌そうに歪む。

「自分の立場を考えろ。それなら気絶させるまでだ」

衣擦れの音が聞こえて驚いて振り向くと、ギルが地面に手をついて、上体を起こそうとしていた。腿のあたりの地面に黒い染みが広がっていて、吐く息は速く、浅い。

ルリオステイゴが私から手を離して、私は支えを失って地面に膝をつく。

「いいことを教えてやる」

ルリオステイゴはギルの側で立ち止まった。

「弾に塗ったのは神経毒だ。貫通しても普通はすぐに動けなくなる。他にも数発かすっていただろう、なのにお前は動いている」

ルリオステイゴはしゃがみこんでギルの赤い髪をつかんで持ち上げる。

「お前、何者だ？」

ギルは薄く開いた目でルリオステイゴを見据える。

「いてえ、引っぱんな」

私は痺れの治まってきた手で、落ちていた自分の銃を拾い上げた。膝立ちのままルリオステイゴの肩を狙って一発撃つと、ルリオステイゴは弾かれたように地面に伏せて、ギルの喉に銃口を当てた。私は息が止まって、銃を握りしめる。

「人質を取るのは好きじゃない」

ルリオスティーゴの目は冷ややかで、微笑は消えていた。

「だがお前が抵抗するなら、殺す」

急速に指先が冷えていく。そんなの、選択肢は一つしかない。

ギルを見ると、ギルはかろうじて保っているのだろう意識で私を見ていた。唇が言葉の形に動いて、頭に焼け付くようにギルの意識が流れこんできた。動力炉の時と同じ、けれど今度はもっと強く、焼きついたのはギルの思考ではなくて、感情そのものだった。

『行くな』

確かにギルは、そう言った。

私はゆっくりと、銃を下ろした。

「安全装置をかけてから渡せ」

ルリオスティーゴが私の方に手を差し出して、私は安全装置を下ろしてから膝のまま歩いて銃を渡した。

「行くな」

途切れた小さな声にギルの方を振り向くと、ギルの瞳が歪む。

「行くな」

刺すような叫び声に、私はそれ以上目を合わせていられなかった。ルリオスティーゴが銃を受け取った手でそのまま私の手首をつかむ。『世界の終わり 透に包まれ 鳥に願い この身の先を封印する フレイア』

手首から流れこんできた魔力で、体の中の魔力の動きが鈍くなる。完全に抑えられた訳ではないが、使える魔力の量も強さも普段の十分の一程になっている。

ようやくルリオスティーゴは立ち上がって、銃を下げて穴の入口へ歩き出した。

「来い」

振り返ったルリオスティーゴに私は首を振る。

「待って下さい、せめて解毒剤をください」

ルリオスティーゴの瞳が細くなって私を睨みつける。

「阿呆か。敵に薬を渡す馬鹿がどこにいる」

「だってこのままじゃ」

叫ぶとルリオステイゴはこちらへ戻ってきて、私の腕をつかみ上げて体ごと引きずっていく。抵抗しようと反対側に体重をかけるが、体を覆っていた魔力もなくなってしまったので簡単に引きずられてしまう。

どんどん暗闇に飲まれていく中、私はギルを振り返る。それでもまだ地面に手をつけているギルの姿を見て、苦しげに細くなった金色の目と目が合った。

電気のように頭の中に焼きついたギルの心は、自責だった。

ああ、そうじゃ、ない。悪いのは私で、私のせいでみんなが傷付くのに、私は世界を壊す力を持つていても、ギルを助けられない。

この力でなければよかった。誰かを救える力がよかった。こんな力ではなくて、ギルと普通に出会って、笑いたかった。

思いがこみ上げてきて、私は叫んだ。

「ギル」

私は初めてこの体を呪って、泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6885x/>

ブリューテ・ドウタ

2011年11月20日03時28分発行